始

佛蘭西語文學講座

平原社刊行

418
441
特250
485

本講座と二姉妹篇並に其他の佛語研究書

此の講座は、第一篇「フランス語ABC講座」及び第三篇「佛蘭西語會話講座」に繼續して、やゝ進みたる佛蘭西語研究者のために、コルネイユ、ラシーヌ、モリエール等の古典作家より ユーゴー、バルザツク、ドーデ、ロチ、アナトール・フランス等の作家の代表作品の譯解とその梗概並に 評傳及び佛蘭西文學の概要を講述したもので、第二篇と合せて一連の最も新味をもつた、又最も內容的であり能率的である佛蘭西語講座を完成すると共に、 此一卷は佛蘭西文學愛好者のためにも他に比類のない好箇の參考書であります。

第一篇 「フランス語ABC講座」 定價 60 錢 送料4錢

此の篇よこれより佛蘭西語を始められる人々のために、又は文法的に佛蘭西語を再研究される人々のために、發音、綴字、リエゾンの講義より、佛蘭西文法の全般に亘り、最も懇切な講義を行つたもので、更に後尾には實習佛蘭西語、飛行用語、辭書の話等の說明も添加されてゐます。

第二篇 「佛蘭西語會話講座」 定價 60 錢 送料6錢

此篇は、前篇 ABC 講座に不足した、Lecture (讀讀) 並に Conversation (會話) の二項目について、特に集中的力を與へたもので、會話と朗讀に微妙な要諦となるニュアンスとイントナシヨンの解說に始まり、最も緊要な佛國及び佛印を主題とした旅行會話、並に日常會話、選文讀本の研究その他を網羅してあります。

なほ以上の書物のほかに本社刊行の

「Q A A 佛蘭西語講座」 全六卷 定價各卷 1 圓 30 錢 送料各9錢

「日佛會話・巴里生活」 全一册 定價 1 圓 50 錢 送料9錢

を御購讀下されば、佛蘭西語の御修得には完璧に近いものと存じます。

獨逸語の御研究には、此の講座と同じ組織による次のものを推薦します。

「ドイツ語 ABC 講座」 全一册 定價 60 錢 送料4錢

ERRATA

Page 1 の Sommaire (目次) の中:

Correct: Jean Racine, Alphonse Daudet

Incorrect: Jeanne Racine, Alponse Daudet

Page 2—40 の lettres à la tête:

Correct: Littérature Française

Incorrect: Litérature Française

帝國圖書館藏

NUMÉRO de LITÉRATURE FRANÇAISE

SOMMAIRE

Pierre CORNEILLE, ピエール・コルネイユの生活と作品 …… 2— 4
Le Cid (ル・シツド) —*Pierre Corneille* …… 4— 5
Jeanne RACINE, ジヤン・ラシーヌの生活と作品 …… 5— 7
ANDROMAQUE (アンドロマツク) —*Jeanne Racine* …… 7— 9
Poquelin MOLIÈRE, モリエールの生活と作品 …… 9—10
Le Bourgeois Gentilhomme (市民紳士) …… 10—12
佛蘭西文學概觀 —十六世紀より十八世紀まで— …… 13—16
Honoré BALZAC, オノレ・バルザツクの生涯 —その作品的傾向— …… 16—18
L'Agonie de l'Avare (守錢奴の臨終) —*Honoré Balzac* …… 18—20
Le Père Grandet (グランデ親爺) 〃 …… 20
Victor HUGO, 人及び藝術家としてのユーゴー —その生涯— …… 21—22
La Discrétion (愼しみ) —*Victor Hugo* …… 23
Alponse DAUDET, ドーデの生活と作品 …… 24—26
La Dernière Classe (最後の課業) —*Alphonse Daudet* …… 27—30
Pierre LOTI, ロチの生活と作品 …… 31
Le BOEUF (牛) —*Pierre Loti* …… 31—34
Anatole FRANCE, フランスの生活と作品 …… 35—36
Abeille (アベイユ) —*Anatole France* …… 37—39
Le Ciel de Paris (巴里の空) 〃 …… 39
全對譯文註解 …… 40

佛蘭西語と佛蘭西文學

一つの國語を究めようとするには、どうしてもその文學に歩を進めなければならない、何故なれば、一つの國語はその文學的作品と伴つて發達してゐるものであるからである。又その文學といふものは、その國民の生活を反影してゐるのであるから、我々はその文學的作品を通して、その國の繁榮及衰退の時代を捕捉することが出來るのである。そして今佛蘭西文學に就てこれを見るも、その例に洩れることは出來ないのである。

大體史學者は、佛蘭西文學の發達を十期に分けてゐる。その第一期は五世紀のフランク王國の創建者 Clovis より十一世紀の封建政治確立に到るまでの時期、第二期は十一世紀の後半より十二世紀まで、第三期は十三世紀、第四期は十四世紀、卽ち英國との百年戰爭の時代である、第五期は La Renaissance (文藝復興) の曙光のあらはれた十五世紀、第六期は、十六世紀卽ちルネツサンス時代である。第七期は十七世紀卽ち Louis XIV 時代。第八期は十八世紀全般に亘つてゐる所謂哲學の世紀である。第九期は十九世紀の前半に當り、第十期は十九世紀の後半より今日に及ぶ時代である。

此の各時期を通じて、佛蘭西文學の作品が漸く獨自の形體を備へて、世界の文學界に光輝を放つことになつたのは第七期卽ち Louis XIV 時代である。これは佛蘭西國威の最も盛んな時代であつて、文學者もこれに伴つて彬出してゐる。Balzac, Voiture, Rotrou, Pascal は何れも此時代の傑出した文學者である。就中 Pierre Corneille の出現は最も光輝を添へたものであつた。本篇は此 Corneille とその作品の紹介に始まり、Racine, Molière, Honoré Balzac, Hugo, Daudet, Loti を經て、Anatole France に筆を收めた。もとよりこれは、數百に上る佛蘭西文學者の一部であり、又これ等の人々と同列にある多くの優位な文學者とその作品を遺してはゐるが、今日、我々の重要なる時機と立場を考慮し、其處に一貫の系統によつてその文學者とその作品を選んだことに就ては、何人に對しても、十分な自信をもつてこれを述べることの出來る次第である。

帝國圖書館藏

～佛蘭西古典文學者とその作品～

PIERRE CORNEILLE (1606-1684)

主なる作品: Le Menteur (1643), Le Cid (1636), Horace, Cinna (1640), Polyeucte (1642), La Mort de Pompée (1643), Nicomède (1651), Sortoruss (1662).
上記の中 Le Menteur は喜劇、他は何れも悲劇です。

Louis XIV 王朝の治下に於て、文學の華はあらゆる方面に渡つて絢爛の美を競つたが、それは特に劇作に於て著しいものがあつた、それまでの佛蘭西劇といふものは殆ど外國文學、就中主として西班牙劇の模倣に過ぎなかつたのであるが、1636 年に Corneille の Le Cid があらはれた時にはじめて其處に稀れなる天才の力による當時の佛蘭西精神の發露を見出して、民衆は喝ぶが如き熱情を以てこれを迎へたのであつた。

"En vain contre *Le Cid* un ministre se ligue: Tout Paris pour Chimène a les yeux de Rodrigue."

(「ル・シッド」に對しては一院を樹立するも効なし、あらゆる巴里人はシメーヌに向ひてロドリーグの眼をば持つ。) これは Boileau がその Satire に書いたもので、當時の權政者 Richelieu が le Cid の稀代の成功に反感をもつて、これを彼の創設した l'Académie française をして批評せしめたことを諷したものである。悲劇 le Cid が此異常な人氣を博した原因は人生不變の問題である誠實と戀愛の衝突を題材とした雄大な構想、文章の類ひなき美しさによることは言ふまでもないが、更に天才を持つて始めてなし得る深い心理の洞察と創造に基いたものであつて、これこそ此劇がその題材をなほ西班牙劇にとつたにも拘らず眞に佛蘭西的のものとして、Corneille をして佛蘭西古典悲劇の創造者となした所以であつた。

Pierre Corneille が生れたのは 1606 年の六月六日で、その家庭は Rouen でも名だゝる顯門であつた。彼が教育を受けたのは其土地の Jésuite の collège で、其學校を出てからはしばし法律に身を委ねながら Rouen の上流社會に往來してゐた。彼は青年の時代に既にいくつかの戲曲—主に comédie—を書いてゐた。1629 年に公演された Mélite もその一つであつた。tragédie (悲劇) としては 1635 年に公けにされた Médée が恐らくその最初のものであつたらう、「此劇の中には後年爛熟した彼の Drama の美しさが胚胎してゐる」と Voltaire も言つてゐる。Le Cid が公演されたのは其翌年であつたが、これは前にも云つた通り佛蘭西悲劇に一新時期を劃したものであつた。彼はこれによつて le véritable fondateur de la tragédie classique (佛蘭西古典悲劇の創設者) といふ名聲を確認したのである。彼が此後に公けにした Horace (1640 年), Cinna (1640 年), Polyeucte (1643 年) も前に劣らぬ傑作であり、事實 Polyeucte の如きは文學としては彼の第一の傑作とさへ認めてゐる人もあるに拘らず、一般には Le Cid を以て Corneille を代表してゐるものと見られてゐるのはその人氣によつたものであらう。

Le Cid (ル・シッド) は五幕からなつてゐる。Corneille が此劇に登場せしめた人物及び筋の大體は 1618 年に西班牙の Valence で上演された、Las mocedades del Cid (ル・シッドの青春の出來事) と呼ぶ Guilhem de Castro の劇によつたものであつた。だがさうした筋書の模倣にも拘らず、Corneille の悲劇には限りなき美しさと類ひなき獨創とが窺んでゐた。

×

此悲劇は Corneille に於ては極めて內面的となつて心と心の爭鬪にその基礎を置く心理的悲劇の典型となつた。此悲劇の筋は大體次の如きものである。

×

Ferdinand 王は Rodrigue の父老 Diègue をして Castille の皇子の太傅とした。Rodrigue の愛人

Chimène の父の Gormas も親に此重職を望んでゐたが、その任命が對抗者の上に下されるのをみて、忿怒の餘り己を自忘れて Diègne に恥辱を與へた。

Don Diègne. Ô rage! Ô désespoir! Ô vieillesse ennemie!
N'ai-je donc tant vécu que pour cette infamie?
Et ne suis-je blanchi dans les travaux guerriers
Que pour voir en un jour flétrir tant de lauriers?

ドン・デイエーニュ、おう憤激、おう絶望、おう呪はしき老癈、俺はたゞ此恥辱を受けにこれまで生きながらへて來たのか。
そして俺は過去のあれほどの勳功(いさほし)に泥を塗られるのをおめおめと見に、あの戰ひの場で腕を磨いてきたのか。

Diègne は自ら復讐するにはあまりに年が取りすぎてゐた。彼はその侮辱者の膺懲をその息子に一任した。Rodrigue は父の此言葉を聞いてから、しばし一人して默想してゐた、彼の頭腦には義理 (le devoir) と戀愛 (l'amour) との二つの感情が麻糸のごとくもつれあつてゐる。

彼は monologue (獨白) に於て此苦腦と逡巡とを語つてゐる。

だが彼は戀より義理の重きをとつて父の讐を討たうとする、併しそれは Chimène の父である。

彼は戀に眼を閉してひたすら騎士の名譽の爲に進んだ。

第二幕では Chimène の父 Gormas 伯爵がロドリーグと決鬪して刺殺されたことが知らされる。Chimène は國王の膝下に泣倒れて父の刺殺者ロドリーグの刑罰を哀願してゐる。

第三幕で Rodrigue は Chimène の邸を訪れる、恰度 Chimène は彼女に代つて復讐をしようと申出てゐる騎士 Sancho に伴はれて王宮から歸邸したところであつた。今 Rodrigue は戀人の手にかゝつて死なうといふ決心で來たのであつた。併し Chimène はどうしても心から Rodrigue を憎むことが出來なかつた。兩人は唯だ豫測出來ない運命の惡戲を呪つて今日の不幸な運命を悲嘆するばかりであつた。

それから Rodrigue は父の Diègne に會ふ。Diègne は喜びに滿されてその息子を迎へる、だが息子の顏に浮ぶ憂鬱を見逃すことは出來なかつた。折しも Maures の Séville に來寇した急報が傳へられた、父は Rodrigue の心の苦痛を紛らはす爲にも此等の Castille 王國の敵と戰ひに行くことを勸告する。

第四幕の最初の場面で Rodrigue が Maures に決定的の大勝を博して歸り來つたことが知らされる。彼は今や國家の運命を負つて立つた大功勞者である。彼は自ら王の面前で此戰爭の有樣を物語る。その物語が終つた間際に Chèmene が再び Rodrigue の處罰を國王に願ひに來たことが報じられる。國王は彼女の Rodrigue に對する本心を窺はうとして一つの計畧を用ひやうと考へる、國王は Rodrigue を退場せしめて Chimène を近づかしめた、そして自ら Rodrigue が戰ひに勝利を得ながらも討死したことを語つた。Chimène は絕え入るばかりに打驚いて、見る眼にも彼女の戀心を鮮に映させた。だがその爲りなことを知つた時には、再び元の氣淸にかへつて Rodrigue に對する奇異な挑戰を固守した。Don Sancho は彼女を救けて Rodrigue と決鬪することを進んで申出た。國王は遂にそれを許した、そして此決鬪の勝利者を Chimène は娶ることになつた。

第五幕では Rodrigue は Chimène の家にあらはれた。戀を失つた身は死ぬより途がないと覺念して、彼は Chimène に最後の訣別に來たのであつた。Chimène は彼に戀に煩はされないで彼自らを守つていくことを懇請する。それから Chimène は Rodrigue が決鬪に臨んだことを知り、恐怖と希望の間に漂つてゐる心の苦悶をあらはしてゐる。Don Sancho は打負されてその劍を Chimène の前にもたらした。彼女は Sancho の語る言葉も耳に入らず彼を Rodrigue の刺殺者と誤認して呪詛する。其處へ國王が出場する。Chimène は國王に向つて Sancho に褒賞を與へられて自らは寺院に入ることを許される樣歎願する。Sancho はやつと彼の失敗を語る機會を得た。Rodrigue があらはれる、彼は自分の打勝つたことを

謝罪して Chimène を宥め、自ら新しい功績を樹てゝ彼女の髓面を償ひたいといふ。國王は彼に Chimène の手を許て他日結婚式の行はれることを豫測させて此劇の幕を閉ぢてゐる。

Corneille の嚴格な性格は若い戀人の心をめぐる燃ゆるばかりの情熱の間にも何者にも代へ難い義理の强さを强調してゐる。此傾向はより後年の作 Horace, Cinna, Polyeucte に於て一層鮮かである、彼をして「義務の詩人」と呼び、又「あるがまゝなる人」よりもむしろ「かくあるべき人」を描かうとしたと言はれてゐるのも玆に基いてゐる。

LE CID

ル・シッド

Pierre Corneille

Don Diègne. Rodrique, as-tu du cœur[1]?

ドン・デイエーニユ　ロドリツク・汝に勇氣といふものがあらうか。

Don Rodrique. Tout autre que mon père
L'éprouverait[2] sur l'heure.[3]

ドン・ロドリツク　それを即座に御知(ぢ)りにならないのは御父ただけで御座りませう。

Don Diègue. Agréable colère!

ドン・デイエーニユ　心よい怒りだ。

Digne resentiment à ma douleur bieu doux!

此胸の惱みにふさはしい小氣味よい恨みだ。

Je reconnois mon sang à ce noble courroux[4];

このわしの血潮はその雄々しいいらだちに通つてゐる。

Ma jeunesse revit en cette ardeur si prompte.

このわしの若さはその湧立つ意氣の內に蘇つてゐる

Viens, mon fils, viens mon sang, viens réparer
ma honte;

されば だ、せがれ、されば だ、わしが骨肉、わしが恥辱を雪いでくれ。

Viens me venger,

わしが讐を討つてくれよ。

Don Rodrique. De quoi?

ドン・ロドリツク　と仰せられますと。

Don Diègne. D'un affront si cruel,

ドン・デイエーニユ　いかにも慘(酷)しい侮辱をだ、このわしが受けた打擲をだ、わし等兩人の名譽

Qu'à l'honneur de tous deux il porte un coup
morte:

はその爲に微塵に打挫かれてゐる。

D'un souflet. L'insolent[5] en eût perdu la vie;

その無道者は生きながらわし等を辱り去つた。

Mais mon âge a trompé ma généreuse envie;

だがわしが矢 桶に逸(はや)る心持も 取る年には克てなかつた。

Et ce fer que mon bras ne peut plus soutenir
Je le remets au tien pour venger et punir.

されば此腕にあまつた劍をば、
汝の腕に渡して讐を征討(うち)させるのだ。

Va contre un arrogant éprouver ton courage;

汝が勇氣の程は此傲慢者に試みてみよ。

Ce n'est que dans le sang qu'on lave un tel
outrage:

かゝる侮辱を拭ふ道は唯だ血潮の間に於てのみだ。

Meure ou tue. Au surplus, pour ne te point
flatter,

死ねか殺すか、二つの途の一つを選べよ。なほ又果々も戒めることは、わしが汝に鬪はす男は怖るべき剛者(ごう)であることだ。

Je te donne à combattie un homme à redouter.

わしはその男が戰場に血砂を浴びてゆくところ、

Je l'ai vu, tout couvert de sang et de poussière,

全軍の恐れ戰のきとならないことのなかつたことを知つてゐる。

Porter partout l'effroi dans une armée entière.

わしは此男の武勇に打挫かれた數多い騎馬武者のあつたことを知つてゐる。

J'ai vu par sa valeur cent escadrons rompus;

そしてそのほかに、もつと言はねばならないことがある。

Et pour t'en dire encore quelque chose de plus.

Plus que brave soldat, plus que grand
capitaine,

勇壯な武夫(ぶを)ものゝふよりも、偉大な軍將よりも

C'est.....

汝にとつて怖れることは、
それが……

Don Rodrique. De grâce, achevez.

ドン・ドリツク　どうぞ、その先きを仰せ下さい。

Don Diègne. Le père de Chimène.

ドン・デイエーニユ　シメーヌの父だ。

Don Rodrique. Le.....

ドン・ロドリツク　あの……

Don Diegne. Ne réplique point, je connois
ton amour.

ドン・デイエーニユ　さあその返答は聞きたくない、わしは汝の戀を知つてゐる。

Mais qui peut vivre infâme est indigne du jour.

だが恥かしめられて生き得たとて、何の生き効(かひ)があらうぞ。

Plus l'offenseur est cher, et plus grande est
l'offense.

侮辱者の地位高ければ高いほどその侮辱は大きいのだ。

Enfin tu sais l'affront, et tu tiens la vengeance:

汝は恥を知つて、復讐をすることだ。

Je ne te dis plus rien. Venge-moi, venge-toi,

わしはそれ以上のことは言はぬ、己れの恨みを晴せ、わしの恨みを晴せ。

Montre-toi digne fils d'un père tel que moi.

わしの如き父の子として恥ぢなき樣に鬪へよ。

Accablé des malheurs où le destin me range,[6]

運命の惡戲に弄ばされ不幸に脅かされて、

Je vois les déplorer. Va, cours, vole, et nous
venge.

わしは悲嘆の底にある、行けよ、走れよ、飛べよ、そして恨みを晴せよ。

【註】 1) As tu du cœur は as-tu du courage の意。 2) éprouverais は éprouverais の古語、以下動詞の語尾變化に oi とあるはこれに同じ。 3) sur l'heure=pour l heure=immédiatement. 4) courrox 憤怒。prose (散文)では此語を使はないで colère の方を用ゐる。 5) insolent=arrogant (無道な者)。 6) ranger は Corncille の時代は玆に用ゐた樣に réduire 導き入れる)意味に使はれた。

JEAN RACINE (1639-1699)

Les œuvres de Racine (ラシーヌの作品)

Théâtre.—Tragédies: La Thébaide (1664), Alexandre (1665), Andromaque (1667), Britannicus (1669), Bérénice (1670), Bajazet (1672), Mithridate (1673), Iphigénie (1674), Phèdre (1677), Esther (1689), Athalie (1691).—Une comédie: Le Plaideurs (1668).

OEuvres diverses.—Des Odes, des Epigrammes, des Cantiques spirituels, Abrégé de l'histoire de Port-Royal, Correspondance.

Pierre Corneille によつて創始された佛蘭西古典悲劇は、Jean Racine によつてその固定した形體を與へられました。此構成の要式は遠く十九世紀の浪漫派の文藝改革が起るまでの久しい間、佛蘭西悲劇を支配して居りました。

Racine の詩文には、古典文藝の大きい特長である豐潤なる意義、力强く明確なる表現に加へて、人の想像力をそゝつて遙かなものを思はせるものがあります。

元來言葉といふものはひとり物の符號であるばかりでなく、それは私達の頭腦に抱く聯想の中心となるものであつて、すべて偉大な詩人といふものはよく選擇した又適宜に置いた言葉を通して、その詩的思想と感情とを人に傳へる技能を持つて居りますが、特に Racine はその點に於て古今に絕した才能の指主でありました。彼の詩文にあらはれた音韻のデリカ(雅趣)さは他に見出し難いものであります。そして人は

Racine の韻文にあらはれた類ひなき音樂的要素の優越をよく認めて居りますが、併し更にその音樂的要素の詩的價値といふものについてはまだよく知られてゐない樣です、けれどもこれは極めて重要な價値であります。

Racine は又その筆を運ぶのに、大きい感情の自然の成行きに枝葉となる樣な事柄はすべて取拂つてその作をだんだんに簡明にする傾向がありました。

彼の最も代表的な作品である Andromaque は戀愛の上に築かれた悲劇、情熱的悲劇の極地を示したものであります。彼の祖述者達の作品に於ては此戀愛も徒に虛飾に走り愚かしい感傷的なものに墮して、大いに甘いものとなりましたが、Racine の作品そのものは、稀れなる天才の手によつて、あらゆるニュアンス（明暗）と人心に透徹する眞實味を以て、大きい情熱を描いたものであつて、それは私達に、あの Andromaq e に於て、あの Iphigénie に於て、又あの Phèdre に於て、精練された情熱と高雅な表現とが、未だ神意のあらはれとして道士や怪人の出現を認めてゐる時代の文明との不調和をさへ氣遣かはせないのです。

概していへば Racine は男性よりもむしろ多く女性を描きました。だが又創造的な意志の强い男性の性格をも描きました。

Racine は戯曲の構成には非常に巧みでありました、彼は卓越した技巧を以て、それに與へられた凡ての要素を綜合していきました。彼は希臘文學に精通して居りましたので、幾度かその暗示を希臘の詩集 Euripide に求めたとはいへ、その構想に於て、又その人物の性格に於て全く獨自なものでありました。その形體 (la forme) について語るなれば、その文體の簡素と氣高さ、詩韻の美しい調和は常に佛蘭西の公衆に美しい魅力を感じさせてゐました。

Andromaque の梗概

Andromaque は 1667 年に Racine によつて作られた四幕の tragédie（悲劇）です、これの主題は Virgile の筆になる Enéide の第三卷にある、が Epire に上陸した Enée の物語からとつたものでありますが、此佛蘭西詩人は此戯曲を書くに當つて、その Euripide の Andromaque からとつたものはその戯曲の名稱と Hermione の性格のみであります。

Racine の構想では希臘の勇將 Achille の子 Pyrrhus が Ménélas と Hélène との間に出來た娘 Hermione を娶ることになつてゐましたが、彼は自分の捕虜となつてゐる父 Achille が殺したトロアの英雄 Hector の寡婦 Andromaque に戀してゐたので、態と結婚の日取を延延してゐることになつてゐました。此時に當つて、希臘の王 Agamemnon の子 Oreste が希臘の大使として Epire に到着して、Hector と Andromaque の子 Astyanax の死を求めることになりました。Pyrrhus は强抗に希臘の命令を拒絶しました。かうして Andromaque にとつては、此 Epire の王 Pyrrhus を彼女の子の最も熱心な擁護者とするも、Pyrrhus の求婚者 Hermomine をその父の許へ送還するも心のまゝではありましたが、彼女は相變らずその愛子にせまる危難をもいとはず、Pyrrhus の申出を拒絶しつゞけてゐました。Pyrrhus は遂にその拒絶に憤怒して、Oreste の切願に從つて Astyanax を犧牲としようとします。Andromaque は最早彼女の愛子のために救はれる道が全くないことを知つて、結婚後は自殺する覺悟をもつて、Pyrrhus と結婚することを承諾しました。彼を愛してゐた Hermione は、自分に戀慕の心を持つてゐる Oreste を今迄は嫌つてゐましたが、これを聞いて、Oreste に Pyrrhus を殺したならば彼女の手を與へることを約しました。Oreste は Pyrrhus が祭壇に行く間際に彼を殺させます。だが Hermione はその時、約束した褒賞の代りに、その罪を呪詛して彼を Furies（地獄の妖神）の復讐に遭はせるといふのが此戯曲の大體の筋です。

ANDROMAQUE

Acte III. Scène 8

Céphise. Je vous l'avois* prédit, qu'en dépit de la Grèce,
De votre sort encor vous seriez la maîtresse.

Andromaque. Hèlas! de quel effet tes discours sont suivis!
Il ne me restoit plus qu'à condamner mon fils.

Céphise. Madame, à votre époux c'est être assez fidèle:
Trop de vertu pourroit* vous rendre criminelle.
Lui-même il porteroit votre âme à la douceur.

Andromaque. Quoi? je lui donnerois Pyrrhus pour successeur?

Céphise. Ainsi le veut son fils, que les Grec vous ravissent.
Pensez-vous qu'après tout ses mânes en rougissent;
Qu'il méprisait, Madame, un roi victorieux
Qui vous fait remonter au rang de vos aïeux,
Qui foule aux pieds vous vos vainqueurs en colère,
Qui ne se souvient plus qu' Achille étoit son père,
Qui dément ses exploits et les rend superflus?

Andromaque. Dois-je les oublier, s'il ne s'en souvient plus?
Dois-je oublier Hector privé de funéraille,
Et traîné sans honneur auteur de nos murailles?
Dois-je oublier son père à mes pieds renversé,
Ensanglantant l'autel qu'il tenoit embrassé?
Songe, songe Céphise, à cette nuit cruelle
Qui fut pour tout, un peuple une nuit éternelle.
Figure-toi Pyrrhus, les yeux étincelants,
Entrant à la lueur de nos palais brûlants,
Sur tous mes frères mortes se faisant un passage,
Et de sang tout couvert échauffant le carnage.
Songe aux cris des vainqueurs, songe aux cris

アンドロマック

Jean Racine

第三幕第八場

セフイーズ　私は前にも申しました、希臘の意向に拘らず、貴方の運命を支配するものはまだ貴女自身てありますと。

アンドロマツク　なに、御前の話の結末はどんなことなのですか。私にはもう私の子供を捨てるより途がないのですが。

セフイーズ　奥樣、貴女はあまりに御亡夫に忠實すぎます、德もあまれば罪になることもありませう。あの方こそ貴女の御心持を和げませう。

アンドロマツク　何んですか。私がピリウスを夫の後繼にするのですか、

セフイーズ　でも希臘人が貴女から奪はうとして居る、あの御子樣にはそれがよろしいのです。ね奥樣、貴女はつまり御亡夫の亡靈がそれを恥辱としてゐられると、御亡夫が勝利の王を輕蔑してゐられると御思ひですか。彼は貴女を再び御祖先の地位に置かれます。彼は貴女のために憤怒した貴女方の征服者達を足下に蹂躙します。彼はもうアシルが自分の父だといふことを思つてはゐません、彼は自分の功績を打消してそれを無用のものとしてゐます。

アンドロマツク　彼がそれを思出さないからといつて、私にそれが忘れられますか。葬儀をさへ營まれずに、あの私達の城壁の周りを、無殘なさらし者にされたヘクトールを忘れられますか、その仕へてゐた祭壇を赤血に染めて、私の足下に倒れた彼の父を忘れられますか。セフイーズよ、考へて御覽、考へて御覽、あの無殘な夜を、それは全市民にとつて最後の夜でありました。あの眼をかゞやかして、燃えさかる私達の宮殿の内に突入し來て私達の兄弟達の死體を踏みにじつて、殘虐をほしいまゝにしたピリウスを頭に浮べて御覽。むせびあがる炎の中に、閃めきわたる劍の下に、聞えた勝利者の喚聲と死者の悲鳴とを考へて御覽。此恐怖の中に意識を失つた此アンドロマツクを描

des mourants,
Dans la flamme étouffés, sous le fer expirants.
Peins-toi dans ces horreurs Andromaque éperdue:
Voilà comme Pyrrhus vint s'offrir à ma vue:
Voilà pour quels exploits il sut se couronner;
Enfin voilà l'époux que tu me veux donner.
Non, je ne serai point complice de ses crimes;
Qu'il nous prenne, s'il veut, pour dernière victimes.
Tous mes ressentiments lui seroient asservis.

Céphise. Hé bien! allons donc voir expirer votre fils:

On n'attend plus que vous. Vous frémissez; Madame!

Andromaque. Ah! de quel souvenir viens-tu frapper mon âme!

Quoi? Céphise, j'irai voir expirer encore
Ce fils, ma seule joie, et l'image d'Hector:
Ce fils, que de sa flamme il me laissa pour gage!
Hélas! je m'en souviens, le jour que son courage
Lui fit chercher Achille, ou plutôt le trépas,
Il demanda son fils, et le prit dans ses bras,
"Chère épouse, dit-il en essuyant mes larmes,
J'ignore quel succès le sort garde à mes armes.
Je te laisse mon fils pour gage de ma foi:
S'il me perd, je prétends qu'il me retrouve en toi,
Si d'un heureux Hymen la mémoire t'est chère,
Montre au fils à quel point tu chérissois le père."
Et je puis voir répandre un sang si précieux?
Et je laisse avec lui désir tous ses aieux?
Roi barbare, faut-il que mon crime l'entraîne?
Si je te hais, est-il coupable de ma haine?
T'a-t-il de tous les siens reproché le trépas?
S'est-il plaint à tes yeux des maux qu'il ne sent pas?
Mais cependant, mon fils, tu meurs, si je

いて御覽。
ピリユスが私の眼前に現はれたのはその時です。
彼が榮冠を載く事になつた功績は其處にあります。
そして現にそれは御前の私に與へようとする夫であるのです。
いや、私はその罪過を分つ者にはなりますまい。
彼が望みなれば、私達を最後の犧牲者とさせなさい。
私の感情もなにも彼が思ひのまゝにもなりませう。

セフイーズ　仕方が御座いません、では若樣の死際を見極めに參りませう。
人々はたゞ貴方ばかりを御待ち致して居ります。
奥樣、御嘆きでは御座いませう。

アンドロマツク　あゝ、お前は、何たる思出に私の心をうち震はすのですか。
いやいや、セフイーズ、矢張り私はあの子、私の唯一の樂しみ、ヘクトールの面影、彼の情熱の筐(かた)として殘されたあの子の、
死際を見極めに行きませう。
あゝ、私は思起しますあの日のことを、
彼が勇氣を奮ひ起してアシルを、いやむしろ死を求めに行つたその日、
彼は此子を呼びよせて、その腕に抱いて、
涙にくれる私の眼を拭つて言ひました、『愛する妻、私の戰ひの運命は私に分らない。
私は此子を私の愛情のかたみに殘す。
此子が私を失つたら、御前の中に私の姿を見出させる樣にさせたい。
若し幸ある結婚の思出が御前に慕はしいのなら、此子に、御前がどんなに私を愛してゐたかを示してくれ。』と、
そして私はかくも尊い血潮の拂はれるのを見ることになるのですか。
そして私は彼と共に彼のあらゆる血統の絶ゆるがまゝにするのですか。
聖蠻な王、私の罪過が此子に償ひしなければならないのですか。
私がそなたを嫌へば、此子はその過罪を分つ者となるのですか。
彼はそなたに彼の近親の死を責めたことがあるのですか。

n'arrête
Le fer que le cruel tient levé sur ta tête.
Je l'en puis détourner, et je t'y vais offrir?
Non, tu ne mourras point: je ne le puis souffrir.
Allons trouver Pyrrhus. Mais non, chère Céphise,
Va le trouver pour moi.

Céphise. Que faut-il que je dise?

Andromaque. Dis-lui que de mon fils l'amour est assez fort.....

Crois-tu que dans son cœur il ait juré sa mort?
L'amour peut-il si lâchement pousser sa babarie?

Céphise. Madame, il va bientôt revenir en furie.

Andromaque. Hé bien! va l'assurer.....

Céphise. De quoi? de votre foi?

Andromaque. Hélas! pour la promettre est-elle encore à moi?

O cendres d'un époux! O Troyens! O mon père!

O mon fils, que tes jours coûtent cher à ta mère!

Allons.

Céphise. Où donc, Madame? et que résolvez-vous?

Andromaque Allons sur son tombeau consulter mon époux.

彼はそなたの前に彼の知らない悪い事々を呪詛したことがありましたか。
けれども、私の子、若しも私が御前の頭に下されようとする殘酷な劍を私がとゞめなければ、御前は死にます。
私はそれをはばみませうか、それとも御前をそこへ差出しませうか。
いや御前は死んではなりません、私はその苦痛をうけるに耐えられません。
さあピリウスに會ひに行きませう。あゝいや、セフイーズよ私のために彼に會つてきて下さい。

セフイーズ　私は何んと言つたらよろしいのですか。

アンドロマツク　彼に告げて下さい、私の子への情愛はかなりに強い……と。
御前は彼が心の中にあの子の死を契つてゐたと思ひますか。
戀は彼の氣持をそれまでも荒ませてゆくのでせうか。

セフイーズ　奥樣、あの方は間もなく憤激して戻つて參りませう。

アンドロマツク　仕方がありません、それを保證してきて下さい。

セフイーズ　何をですか、貴女の愛情をですか。

アンドロマツク　あゝ、それを約束するのは、未だ私の考へにあるのですか。
あゝ、夫の死體、あゝトロアの人達、あゝ私の父樣、
あゝ、私の子、御前の生命は御前の母にとつてなんと高く價ひしたことでせう。
さあ行きませう。

セフイーズ　何處へですか！奥樣。そしてどう御決心なさつたのです。

アンドロマツク　私の夫の墓場へ行つて、彼の心をきゝませう。

* avois, restoit, pourroit は avais, restait, pourrait の古語、その他動詞の語尾變化に oi とあるは、今日 ai と書かれてゐる語。

Jean-Baptiste Poquelin MORIÈRE (1622-1673)

主なる作品: Les Précieures Ridicules (1659), L'Ecole des Femmes (1662), Don Juan (1665), Le Misanthrope (1666), Amphiryon, George Daudin, L'Avare (1668), Tartuffe (1669), Le Bourgeois gentilhomme (1670), Les Fourberies de Scapin (1671), Les Femmes Savantes (1672), Le Malade imaginaire (1673).

Molière は過去に佛蘭西が生んだ數多い有名な創作家の中でも、特に最も佛蘭西的と言はれる一人で

ありませう。彼れの生存してゐた十七世紀の佛蘭西は Louis XIV の治下に於て、絢爛たる文化の華は此國に咲出で、藝術の天才は相次いで彬出し、所謂後世にいふ文藝の黄金時代が現出してゐたのであります。

Molière は此美しい時代に生れ、華やかな社會に介在し、而も恐らくは彼れでなければ爲し得られなかつた多くの不朽の藝術を創造したとはいひながら、彼れの個人生活といふものは決してなごやかなものではありませんでした。彼れはせめては舞臺の上に於て笑はなければならなかつたのでせう。彼れがあの永久に傳はる喜劇を書きながら眞の涙を流さなければならなかつたことも幾度であつたでせうか。

彼れは若年の頃、ほゞ十二年に渡つて田舍芝居の喜劇役者を勤めてゐて、その間眞に言語に絶するほどのあらゆる辛慘を味ひました。殊更彼の戀女房 Armande Béjart の放埒な生活はどんなに彼れの心を苦しめたでせう。軒にはせまる債鬼の群れ、逃れば追ひせまつて、くる日もくる日も彼れをのどかに過させる日とてはなかつた位でした。眞に憐れなる Molière です。此國の

"Tel qui rit vendredi, dimanche pleura."

金曜日に笑ふものは日曜日に悲しむ。

といふ諺はいかにも彼にこそ事實でありました。彼のかうしたみぢめな生活は Louis XIV 朝廷の事好む貴族達の笑談のよい種となつたことさへ屢々でした。だが Molière はその苦しい生活と勇敢に闘ひました、靜かに力强く、口唇には冷笑さへ浮べて、恰も "Rira bien qui rira le dernier." (最後に笑ふものこそ眞に笑ふもの) といふ樣に。事實、彼の鋭い筆鋒の下に翻弄されたものは hypocrites (僞善者) であり、pédants (半可通者) であり、faux dévots (僞信者) であり、fausses savants (僞學者) でした、これ等の者は、此喜劇筆者の心意をあらはにさとらば、當に地中にもぐり込まなければならない人達でせう。だが何んと世の中は不思議にも皮肉なものでせう。一度び Molière の喜劇が偉大な成功を博した時、その喜劇の觀客に最も高らかに笑つてゐる男女の讃美者こそ、豈に圖らんや Molière その人が最も嘲けらうとしてゐるその人々ではありませんか、此世の中こそ眞の喜劇の連續でなくて何でせう。

彼れの戲曲の內の性格描寫は、全く Molière 獨特のものでした。彼れは凡ての國に又凡ての時代にうつろひのない永久の形體を創造しました。喜劇は Molière によつてはじめて、それまでのたゞ徒に人を笑はせようとした、淺薄で下品な舊い型を脫して、新しい途を取ることが出來ました。纖細な人情の機微をあくまで穿つてゆく此 Molière の創造した喜劇を人は性格の喜劇 (la comédie de caractère) といつて居ります。

今彼れの comédie の中から、最も有名なもの一つである "Le Bourgeois gentilhomme" (1670年作) から一文を選んで、その comédie の片影をうかゞふことにしませう。

LE BOURGEOIS GENTILHOMME (1670)

一市民 monsieur Jourdain は自ら紳士の資格を整へたいと念じてゐた、そして當時の貴族の人々の知つてゐることやすることを悉皆學んだり行つたりしようとした。彼れは侯爵夫人 Dorimène に戀してゐたが、慘めなことにも Dorante 伯爵に瞞着されて、自分の金で買つた寶石は伯爵のものとしてドリメーヌ侯夫人に贈られて了ふ、その揚句ドラント伯とドリメーヌ侯夫人とは結婚する。Jourdain の妻女は此良人の馬鹿げた仕草に大に憤激する。だが Monsieur Jourdain は此度はどうかして紳士の婿を貰ひたいと思つてゐる。が結局總明な彼れの娘は、戀人 Cléonte を父の氣に入る樣に土耳古の大貴族に仕立て、結婚するといふ筋である。此の芝居で最も知られて場面の一つは哲學の先生が M. Jourdain にいろいろな學問を講釋したり、母音と子音を說明したりした揚句に、戀文の書き方を相談されるところである。

Le Maître de Philosophie. Je vous expliquerai à fond toutes ces curiosité.

哲學の先生　御不審なことは何でも徹底的に御說明申上ませう。

Monsieur Jourdain. Je vous prie. Au reste, il faut que je vous fasse une confidence. Je suis amoureux d'une personne de grande qualité, et je souhaiterais que vous m'aidassiez à lui écrire quelque chose dans un petit billet que je veux laisser tomber à ses pieds.

ムツシユ・デユルダン　どうぞ御願ひします。ところで、先生に秘密を御話し致さなければなりませんが、私はある高貴の方を戀してゐるのです、でその方の足もとへ落しておく短かい戀文の中へ書く文句に御手傳ひを願ひ度う存じます。

Le Maître de Philosophie. Fort bien!

哲學の先生　いかにも承知しました。

Monsieur Jourdain. Cela sera galant, oui.

ムツシユ・デユルダン　それは雅びた事でせうね。

Le Maître des Philosophie. Sans doute. Sont-ce des vers que vous lui voulez écrire?

哲學の先生　勿論です、あなたが書かうとされるのは韻文ですか。

Monsieur Jourdain. Non, non; point de prose ni vers.

ムツシユ・デユルダン　いゝえ、いゝえ、韻文ではありません。

Le Maître de Philosophie. Vous ne voulez que de la prose?

哲學の先生　では散文だけがよいのですか。

Monsieur Jourdain. Non, je ne veux prose ni vers.

ムツシユ・デユルダン　いゝえ、私は散文でも韻文も好みません。

Le Maître de Philosophie. Il faut bien que ce soit l'un ou l'autre.

哲學の先生　それはどちらかでなければならないのです。

Monsieur Jourdain. Pourquoi?

ムツシユ・デユルダン　何故です。

Le Maître de Philosophie. Par la raison, monsieur, qu' il n'y a, pour exprimer, que la prose ou les vers.

哲學の先生　でもムツシユ、言葉で表現するには韻文と散文としかないのですから。

Monsieur Jourdain. Il n'y que la prose ou les vers?

ムツシユ・デユルダン　散文と韻文しかないんですつて。

Le Maître de Philosophie. Non, monsieur. Tout ce qui n'est point prose, est vers; et tout ce qui, n'est point vers, est prose.

哲學の先生　さうです、ムツシユ。ですから散文でないのは悉皆韻文で、韻文でないのはみんな散文です。

Monsieur Jourdain. Et comme l'on parle, qu'est-ce que c'est donc que cela?

ムツシユ・デユルダン　そんなら私達が話をする時のものは何なんです。

Le Maître de Philosophie. De la prose.

哲學の先生　散文です。

Monsieur Jourdain. Quoi! quand je dis: "Nicole, apportez moi mes pantoufles, et me donnez mon bonnet de nuit," c'est de la prose?

ムツシユ・デユルダン　何に、私が、『ニコラスよ、私に上履を持つて來い、それから寢帽(ナイト・キヤップ)を出してくれ』といふ、それは散文ですか。

Le Maître de Philosophie. Oui, monsieur.

哲學の先生　さうですとも。

Monsieur Jourdain. Par ma foi, il y a plus de quarante ans que je de la prose, sans que j'en susse rien; et je vous suis le plus obligé du monde, de m'avoir appris cela. Je voudrais donc lui mettre dans un billet: 'Belle marquise, vos beaux yeux me font mourir d'amour,'

ムツシユ・デユルダン　なるほど、では私は四十年あまりも何も知らずに散文を話してゐたのですね、でそれを御敎へ下さつた先生に衷心から感謝致します。ところで彼女には、便箋へ『美しい侯爵夫人よ、あなたの美しい御眼は私を戀に狂はせた。』と書きたいと思ひます、ですがそれを優雅な形なほに

mais je voudrais que cela fût mis d'une manière galante; que cela fût tourné gentiment.

したいと思ひます、それを上手になほして下さい。

Le Maître de Philosophie. Mettre que les feux de ses yeux réduisent votre cœur en cendres; que vous souffrez nuit et jour pour elle les violences d'un.....

哲學の先生　彼女の眼ざしはあなたの胸を焦してゐる、あなたは彼女のため晝夜熱烈な……に駈られてゐると書いたらどうです。

Monsieur Jourdain. Non, non, non; je ne veux point tout cela. Je ne veux que ce que je vous ai dit: 'Belle marquise, vos beaux yeux me mourir d'amour.'

ムッシユ・デユルダン　いゝえ、いゝえ、いゝえ。私はさうは書きません。私はあなたに言つた通り、唯だ、『美しい侯爵夫人よ、あなたの美しい御眼は私を戀に狂はせました。』とだけ書きたいのです。

Le Maître de Philosophie. Il faut bien étendre un peu la chose.

哲學の先生　少しはそれを演繹しなければなりません。

un peu la chose.

Monsieur Jourdain. Non, vous dis-je. Je ne veux que ces seules paroles-là dans le billet, mais tournées à la mode, bien arrangées comme il faut. Je vous prie de me dire un peu, voir, les diverses manières dont on les peut mettre.

ムッシユ・デユルダン　いゝえ、私は反對します。私は此の僅かな言葉だけを便箋に書きたいのです。たゞそれを新しい言ひまはしで上手になほしたいのです。どうぞそれを書きかへられる形をいくつか分る樣に少し敎へて下さい。

Le Maître de Philosophie. On les peut mettre premièrement comme vous avez dit: 'Belle marquise, vos beaux yeux me font mourir d'amour.' Ou bien: 'D'amour mourir me font, belle marquise, vos beaux yeux.' Ou bien: 'Vos yeux beaux d'amour me font, belle marquise, mourir.' Ou bien: 'Mourir vos beaux yeux, belle marquise, d'amour me font.' Ou bien: 'Me font vos yeux beaux mourir, belle marquise, d'amour.'

哲學の先生　先づ第一に、あなたの仰言つた通りに書くことが出來ます、『美しい侯爵夫人よ、あなたの美しい御眼は私を戀に狂はせました。』又は『私を戀に狂はせました、美しい侯爵夫人よ、あなたの美しい御眼は。』又は『あなたの美しい御眼は戀に私を、美しき侯爵夫人よ、狂はせました。』又は『狂はせましたあなたの美しい御眼は、侯爵夫人よ、戀に私を。』又は『私はあなたの美しい御眼は狂はせました、美しい侯爵夫人よ、戀に。』

Monsieur Jourdain. Mais de toutes ces façons-là, laquelle est la meilleure?

ムッシユ・デユルダン　ですが、此等のすべての言廻しで、どれが一番よいのですか。

Le Maître de Philosophie. Celle que vous avez dite: 'Belle marquise, vos beaux yeux me font mourir d'amour.'

哲學の先生　あなたの先程言はれた、『美しき侯爵夫人よ、あなたの美しい御眼は私を戀に狂はせました。』といふのが。

Monsieur Jourdain. Cependant je n'ai point étudié, et j'ai fait cela tout du premier coup. Je vous prie de venir demain de bonne heure.

ムッシユ・デユルダン　ですけれど、私はそれを少しも研究しなかつたのです。私はそれをたゞ一息に作つたのです。ではどうぞ明日はお早く御出で下さいまし。

Le Maître de Philosophie. Je n'y manquerai pas.

哲學の先生　缺かさず參上致します。

佛蘭西文學概觀

十六世紀—十八世紀

(1) 十六世紀

Marot と Ronsard 及び Du Belley

十六世紀は佛蘭西文學が國內的要素と國外の要素とが相結合して、初めて世界文學の列に這入れた時代である。詩歌の方面を一瞥するとその過程がよく分る。

當時の國王は Françis Ier で王其人が Renaissance 型の人であつた。知識欲が盛んに燃えてゐる人で學藝の隆盛ならんことを欲してやまなかつた人である。古典詩にまれ中世詩にまれ勿論現代的の詩にまれ、凡てを愛し歡迎した。世界古詩のみならず、自國の古詩を王自ら研究し極力その時代を藝術的色彩を以て塗りあげんとした。王が十六世紀初頭のフランスの藝術界の空氣であつた。この絢爛な潮の眞只中に一本の詩筆を以て飛びだしたのが、Marot である。彼は勿論王にも愛され、尊ばれ、宮中では深く用ひられた。彼の詩作も言動も皆時人を動かしてゐた。

彼は先づ譯詩に力を注ぎ、第一には羅馬の詩人 Virgil の "Ovid" を譯し、つゞいて伊太利の Petrarch の詩、西、英、の詩を皆譯し、舊約聖書の詩篇を譯した。譯詩によつて古代と同時代の他國の詩歌をとり入れるに非常に力あつた人である。彼はまた、自國の古詩、他國の古詩の精神をとり入れたと同時に、同時代の他國の思潮、文明、敎化をもとり入れることを忘らなかつた。彼の求むるところは悉くの外國要素があく迄も外國要素に終らずして、いつかは自國の精神に融合し確固たる自國藝術の建設されることであつた。佛蘭西獨特の文學詩歌が、その國民性の上に建設されることであつた。要するに、彼は譯詩の眞意を誤らなかつた人である。

今度は彼自身の作物から彼を見ると、その性格は如何にも當時の佛人らしく、物の自然を尊びあく迄も奔放自在な姿、技巧を廢して心の眞姿を求め貪らうとするところがよく見えるのである。フランスの詩歌に獨特なる閑雅な纖細な點は初めて Clément Marot の詩のうちに表現された觀がある。近代佛蘭西詩歌界の第一人者である。

Marot の精神及びその詩の傾向を追ひ更にそれを擴大し確固ならしめたのは Pierre de Ronsard である。

Ronsard の父親が Francis Ier に仕へてゐた爲に Ronsard は早くから宮中にはいる機會を得てゐたが、1548 年 24 歲の時聾になるに及んで宮廷を退いた。

その年 Du Belley と云ふ詩才に富んだ男に逢ひこの兩者の結合が彼等の周圍に五人の同志を集めた。自ら "La Pléiade" (七星派) と稱し同じ名の詩集を出した。これが端なくも世の注意をひいたのである。其の後彼等は唯、古典藝術にのみ憧れるのでなく其精神を捕へると同時に佛蘭西人の精神を生かさねばならぬ。即ち佛國民を培養するものをとればよい。それが爲に詩論として近代初歌の詩論 "La Défense et Illustration de la Langue Française" が出來た。

Du Belley の著である。一方に於ては立派な詩歌論だが中には燃ゆるが如き彼の要求精神も含まれてゐる。

◇

古典藝術をたゞ藝術として尊重するのみでなく當時の人の生活に入り取り得べきをもつて佛蘭西人の精神を發揮すべきである。フランス國民の國民的精神を發現しそれを豐富にするには古典藝術の飜譯のみでなく各國の詩の飜譯に力を用ゐた。又詩形の試みが今日のフランスのリズムやスタンザの基をなしてゐる。又自國の精神をあらはすには純粹のフランス語がなければならぬ。その點からフランス語の權威を發揮しやうとした。Ronsard を『佛語の父』と云ふのはこの歷史的の意味からである。彼は 5 年間續けて "La Franciade" といふ大部の叙事詩を作りフランスの精神を現はさうとしたが佛蘭西の國民精神のいかなるものか又當時の人の意氣込を知るには大切なものである。半ば抒情詩的な半ば叙事的

と云ふやうな Odes に於て時代の如く若々しい神聖な幸福な明るい聲の親しい發現がよく出てゐる。Du Belley の詩と Villon の詩とを比較して見ると如何にも黎明期の詩歌の知識と古き時代のくらくきえゆくのとがいかにも截然と區別される。

Du Belley の方を今少しのべる。

"La Défense et Illustration de la Langue Française" の論文は、詩論として作詩の態度を論じたものでは最初のものである。この詩論はそれほど直接に今日價値がなくもその中の特色だけを云へば大切である。

詩人は世俗的生活をあくまでもなし得る人でなければならぬ。實際の現實生活に強く生きて行きながらしかも社會階級などに累せられぬ人でなければならぬ。そして藝術の大部分は傳習と摸倣とである。模倣とは何であるか? それは假に模倣といふ言葉を用ゐるが實は自分等の中心の心をうたひ出さんが爲に古代たるを問はず他國たるを問はず最も自分と氣の合つた先人をえらみ、その人々の辿つた道、表現した藝術を味つて自分の內部の發現に資する樣にする。模倣とはいつでも發現の形式そのものゝ模倣ではなく詩人その人の生きてゆく道を似よつた人によつて示されることである。さういふ心持で彼等はひろく藝術の研究もし自國の精神の發揮をもつとめた Du Belley その人は詩人として詩作をもつてゐるばかりでなくその創始時代の劇作に價値を與へる人として忘るべからざる人である。

(2) 十七世紀の概觀

十七世紀は最も完全な世紀と云はれてゐる。その意味は先づ劇の方面では Racine, Corneille, Molière の如き三人の大作家を出し、哲學では Descartes を出して佛蘭西のみならず近代の哲學をひらく世紀であるし、詩に於ては Malherbe とか、また世紀の半から末にかけては La Fontaine の詩、Boileau の詩論などに於て最も判然と佛蘭西の精神の現はれた時である。その中に伊太利、西班牙の精神をとり入れ、しかもそれを自己のものとして支配して行つた時代であつて、當時歐羅巴文學の中心であつた。今までの世紀で最も賑やかな世紀は十九世紀であるが、最も完全に表はれたのは十七世紀とみて差支ない。

之を內面的に批評すれば、一時 Renaissance に依つて解放せられた人心が飽までも發展を期して多大の希望をもち、殆ど無批判的な欲望に身を委してゐた時である。併しかくの如き欲望が悉く滿される譯にはゆかない。Renaissance を去るに從ひ以前の欲望に批判を加へ制限を加へざるを得なくなる。この欲望冀望に對し一種の不安を抱き、狂氣より眼ざめて周圍を顧みざるを得なくなる。心弱き者は自己の要求が大に過ぎるために悲觀に陷つたり、或はその悲觀を反抗的に表はして皮肉となり嫉みとなり、轉ては僧人の心持を周圍に浴せかけて嘲笑してゐるといふことになる。中にはあくどき要求を追かけて grotesque な姿を呈してゐる。さういふ各人の複雜な心理狀態が Corneille, Molière, Racine に悲劇喜劇の材料を提供したものとして差支ない。

又一方から見ると Renaissance のためにそゝりたてられた人間の好奇心、ひたすら眞を求める心、それが末になると珍らしきもの、唯現在に遠きもの卽ち古代文藝の中で捨てられて了つたものを拾ひ出してその博覽强記を誇るとか grotesque なものを誇るとかいふ傾向や日常生活の風習や社交狀態にまで一種の凝つた奇怪な風習をみせてきた。それが文學上では grotesque な詩人となり、それが理知的な表れをする時は冷酷辛辣諷刺諧謔となつて表はれてくるものである。その傾向は寧ろこの世紀の末から十八世紀の前半に涉つて表はれてゐる傾向である。

ところがもう一方 Renaissance の初期に示した潑剌な制限のない狀態が末になると Renaissance の精神はいつか稀薄になつて、復興せられたる古文學の形式條理だけを特に重んずるやうになる。例へば古典劇の三一致などが嚴守せられて、Racine の劇の如き如何にも整つてはゐるが波調の面白味はない。一時は新に目を覺して大自然の前に胸を轟かしてゐたのが再び眼を閉ぢて了ふやうになつたのである。つまり極端なる解剖から疲れた中庸調和整調明確を尊ぶやうになつた。Boileau の詩論の如きは明にそれを代表してゐる。物の整つたのを尊び、力や

深さは第二に置いてゐる。

Renaissance に於て各人は自己の思ふ儘に走つた個性的な心持がまた總合し概括して類型的なものとなつた。Molière は類型を描くに最も勝れた人物であると云はれてゐる。

要するに十七世紀から十八世紀の中頃までの文學の特質は現在的である。そして平調である。而して文學の材料の範圍に這入つて來るものは、都會とか上流社會とかに限られ、その上流社會の生活も Café とか Salone とか宮廷とか飽迄も人間的なところに材料が捉へられてゐる。客觀性を尊び感情、想像を抑へて理知的發現に重きを置いた時代である。それ故詩歌に於ても La Fontaine の Fable のごとく敎訓的なものになり、議論は多く諷刺諧謔に終る傾向である。畢竟、Renaissance の氣息を十分に延ばしそののびきつた勢が次第に弱り形だけに止つた時代である。その形式にかたまりかゝり、而して形式に墮して行く醜くさを諷刺しながら又自分自身その中の一人であり遂に形式に捉はれて終始して行つた人がかの Voltaire である。その形式に墮したのを破ることに努力して眞に生きた光を導き出したのが Rousseau である。故に次の時代は Voltaire により古き時代の終りを告げ、Rousseau により新しき曙光を見る時代である。〔この一篇は Sainte Beuve の「十七世紀の諸相」に據るところあり。〕

(3) 十八世紀の概觀

十八世紀はルネツサンス (Renaissance) 以後の近代文學史上に最も隆盛な時で、哲學に、劇に、詩に、詩論に、散文の物語にみな完全な姿をみせてゐた。けれどもそのうちに次第に文藝復興の內的精神を失つて形式のみに走らうともしてきた。また一方に於ては政治、宗敎上の自由が未だ許されてゐない。マルチン・ルーテル (Martin Luther) の改革以來新敎 (Protestantisme) が行はれてゐたもの、カトリツク敎 (Catholicisme) の勢力が盛で、それが政權に結びついて自由思想家の上に著しい壓迫を加へてゐた。實際、今日吾々が想像も出來ないほどの壓迫を加へてゐた。ヴオルテエル (Voltaire) が生れた千六百九十四年及びかれがその幼年を過した當時は、未だルイ十四世の治下にあつて恐るべきまた信じ難き迷信が行はれ、新敎徒の大虐殺が行はれた。一時に三十萬の無辜の民が殺されたり、或は幾萬といふ人民がその鄕土を放逐されたり、或は死者の屍は路旁に捨てられては野犬の腹を肥し、川といふ川は死屍で理つてゐたこともあつた。それが、パスカル (Pascal) が出、デカルト (Descartes) が出、コルネイユ (Corneille)、モリエール (Molière)、ラシーヌ (Racine) が出、ボアロー (Boileau) が出、ラ・フオンテーヌ (La Fontaine) が出た時代を距ること遠くない時の出來事なのである。また今日からして二百年以上幾許も經つてゐない時代なのである。殆んど信じ難きまで極端から極端に走る佛蘭西人の性格の一方面をうかゞふことのできる狀態である。この狂暴な宗敎上の迷信と橫暴なる貴族の壓迫と暴政とを脫却しない限りは眞の人間的自由性は流露しない筈である。眞の近代主義はそれが破れてこそ始めて溢れ出づるのであつた。

これらの社會上、政治上、及び宗敎上の壓迫、拘束に對し第一に惡罵嘲笑の鋭い刄を向けたのはヴオルテエルその人であつた。さらばその意味に於てルツソオが modernisme の先覺であるといはれるに對してヴオルテエルは modernisme の急先鋒と呼ばるべきである。かれが世に出た頃の社會狀態は今云つたやうであるが、その頃の思想界の狀態は所謂十八世紀の獨斷的哲學が支配してゐたのである。それは哲學とは云ひながら迷信の塊と云つてよからう。卽ち『宗敎及び宗敎上の信仰なるものは人間の他のあらゆる知識とは全く異つたものである。それは寧ろ人間に屬するものでなくして神に直屬すべきもので、超人間的な超自然的な權威をもつてゐるものである。從つてこの權威ある宗敎上の信仰なるものには如何なる人間の條理も道德も批評を加ふべきではない。宗敎の示す信仰箇條は絕對のものとして承認すべきである。それを論議し批評することは直に神を瀆すことである。從つて新敎 (Protestantisme) の如き自由討究の精神は全く瀆神罪と云はねばならぬ。』といふのである。これだけのことを見ても解る如く、如何にルネツサンスの精神が失せて了つて中世紀時代の宗敎に戻らうとしてゐたかゞわか

る。つまり文藝上に現はれたる grotesque と同じく宗教上思想上に現れたる grotesque とみるべきである。それに加へてルイ十四世の廣大な權力、之に附隨する貴族等の專横、それが政治的生活、社會的生活に於て壓迫を加へ、宗教改革をもつて始つた思想上宗教上の內的活力を飽くまでも抑壓しようとしてゐたのである。併しその壓迫が効を奏すれば再び暗黑時代が始まつたのであるが、それに對して闘つた當時の人々の精神は單なる感情一方のものでなくして近代の科學的精神と共に自由討究の要求、個人の確實なる保護發展等を求めて外部の壓迫にうち勝つた許りでなく、併せて政治組織を根本より轉覆し、ついで眞の意味の近代的傾向を作り出すに至つたのである。恰も中世紀が宗教の教養をうけて近代に移らんとする準備時代であつた如く十八世紀は主として科學的精神の教養に依つて最近代の世界を拓かんとする準備の時代と思はれる。その獨斷的哲學及び社會上宗教上の暴政壓迫に對し主として破壞的にそれに向つたものがヴオルテエルであり、積極的にその中に曙光を導き入れたものがルツソウである。ヴオルテエルの考をつきとめれば宗教及び宗教的情緒なるものは當然人間のうちにあるべきので、從つてその宗教的信仰といふことも十分に人間が論議し批判して構はぬものである。云ひかへれば飽くまでも人間本位の生活でなければならぬ。宗教的情緒は人間にとり最も尊いものであると假定しても、人間を超越するものでなくして人間の所有でなければならぬ。のみならず人間の能力の方から考へれば道德上の良心知力上の理性、それら以上に高い權威のある筈はない。故にもし理性に反し道德法に反するやうな神聖なものがあつたら、それは神の命令でなくして、寧ろ惡魔の命令である。それらこそ絕對に却くべきものである。さういふ見地から進んで宗教的情緒の如きものも實は迷信に過ぎない。理性から見て肯がはれないものを人は超人間の命令の如く考へるけれども、それは愚人の情緒と云はなければならぬ。ヴオルテエルの人間本位の思潮—理性に依つて事を判斷し、理性に反したものは飽くまでも破壞せんとする人間性の確定—個人本位要求の發芽、それらはヴオルテエルの功績として今日十分に認めなければならぬ。ヴオルテエルが思想家としては何も積極的な思想を殘さなかつたと非難されてゐるが、破壞的に努力してゐる人には何時も加へられる非難であつて、同時に消極的努力を忘れられたる不利な地位に立つてゐる。吾々はかれの中から近代批判的精神の發展してきたことを認めなければならぬ。時代が古いだけに、かれが宗教上の迷信に對して人間の知力上道德上の權威を確立した功績は忘るべからざるものである。

BALZAC の 生 涯

オノレ・バルザツク (Honoré Balzac) は 1799 年5月16日に Tours に生れた。Honoré de Balzac とは、後年彼自ら改めたものである。父の François Balssa は夙に Balzac と姓を改めてゐた。父は 1746 年 Tarn 縣 Nougaïrié に生れた。祖父は Balssa と稱し、Nougaïrié 小教區の農夫であつた。オノレの母 Laure Sallambier は 1778 年に巴里に生れた。このやうに直系尊族の血統が複雜であるために、バルザツクは、トウール人 (tourangeau) でもなく、ラングドツク人 (languedocien) でもなく、parisien でもない。"simplement de race français" である。

彼の父は强壯な、多血質な (sanguin) 人であり、多辯な人、多讀の人であつた。また人の氣がつかないやうな計畫や考へを持つて居つた。彼の父の性格に表れたさまざまな特徵がバルザツクにもよく傳へられてゐる。殆んど凡ての事に無頓着なところなどは、そつくり父親の氣質を受繼いだものであらう。Balzac が父の性格を多分に與へてゐる作中の人物は、"Médecin de Campagne" の docteur Bénassi である。

父親は、l'ancien régime の下にあつては、無名の一法律家であつたが、大革命のお蔭で世に出る機會を得たのであつた。1793 年の國勢年鑑 (l'Almanach national) を見ると、officier musicipal 並に

membre du conseil général de la Commune となつてゐる。兵站部長 (administrateur aux vivres) として、北方の國境に派遣されたこともあつた。1797 年、同じ兵站部に屬してゐた人の娘 Saure Sallambier と結婚した。1804 年から 1811 年に至る 8 年間は、トウール (Tours) の hospice général の理事となつてゐた。1798 年以來トウールに於ける hospice の本部に勤めてゐたので、オノレの生れたのも此町であつた。行政官の職務外に、トウール市の助役を兼ねてゐた。1814 年兵站本部員として、巴里に赴任し、1817 年に退職するまで巴里に止まつてゐた。退職後は Villeparisis に居を定め、ついで Versailles に移り住み、1829 年 83 歲で世を終つた。

バルザツクの母は、夫より 32 歲年下で、息子より 21 年の年上であつた。此婦人は非常に聰明であり、極めて才氣走つたところがあつた。美しい眼、長くて細そりした鼻、少し緊つた口の非常に綺麗な容貌の持主であつた。無愛想な、横柄なところがあつて、卜占や極めて形而上學的な作物を好むところは、この母親の性質を受けたものらしい。彼女はバルザツクの死後數年生き永らへてゐた。la Cousine Bette の性格として描れてゐるのは、母親の最も不愉快な性質を表してゐるのだと、一般に思はれゐる。

バルザツクは總領で、妹が二人、弟が一人あつた。Laure といふ妹は、バルザツクより 2 つ年下で、終生彼の最上の相談相手でもあり、親友でもあつた。この Laure は、バルザツクに關して興味の盡きない mémoires を殘しておいて與れた。二番目の妹 Laurence は de Montzaigle といふ人と結婚したが、1826 年に夭死した。弟は青年期を過ぎると、亞米利加へ行つて、窮迫して生活を送り、これも夭死して了つた。

Honoré は、始めトウールの lycée に通學したが、そのことは Lys dans la vallée に少し書いてある。次いで 1807 年 9 歲の時に、collège de Vendôme に轉校した。轉校の理由は解らない。當時にあつては、非常に有名な學校で、嚴格な Oratorien (天主公教の一派に屬する信徒) 達に管理されてゐた。Honoré は謂ふところの勉强はしなかつたものゝ、讀書だけには沒頭したらしい。また氣紛れに色々なことを書き散した。年に不似合な題目のものがかなり澤山あつた。後年になつてこの collège に於ける生活を、Louis Lambert のうちに述べてゐる。かういふ濫讀濫作のために、腦炎 (encéphalite) を惹起した。母親が呼ばれて來てみると、Honoré は青い顏をして痩せ細り、氣拔けのやうになつてゐる。吃驚して自宅へ連歸つた。1813 年 8 月 22 日、恰度 15 歲の時であつた。

家へ歸つてから身體はメキメキ快くなつてきたので lycée de Tours の三年級に還入つた。1814年父親が巴里に轉任したゝめ、Honoré も Marais にある institution Lepitre に入れられた。Lepitre 氏は Honoré に望みを掛けて、深く彼を愛護しかなり大きな影響を及ぼしてゐる。この Lepitre は、恐怖時代 (la Terreur 1793 年 5 月 31 日より 1794 年 7 月 27 日に至る革命の一時期) には王室のために危難を冒した人で、加特力の教を固く守り、極めて忠誠なる王黨であつた。從つて此の人の思想が、幾分なりとも此青年の頭に影響したのは當然のことであらう。

繼續して確實な勉强もしないで、修學の期間を過したバルザツクは、公證人 Guyonnet-Merville 氏の事務所に還入つた。19 歲から 20 歲にかけて、彼は元氣よく訴訟手續といつたやうな實務に沒頭し、法律の研究をした。その傍ら努めて文科大學の講義を聽講した。父親からは一文の仕送りもない貧しい研究生の境涯、それを彼は Peau de chagrin の中に、心を籠めて記錄してゐる。

20 か 21 歲の時に、素晴しい提案を父からうけた。昔父親が一方ならぬ世話をした或る公證人が、まづ最初に自分の書生にしようと言つて來た。次いで極く穩かな財政上の條件の下に自分の後繼者にして遣らうと申出た。學生時代からさうであつたのたが、特に Sorbonne の講義を聽いてからは、抑へられぬほどに文學上の大望を培つてきたバルザツクには、公證人の仕事は何よりも好ましくないものであつた。寧ろ怖ろしい思をさせられる職業であつた。彼はその提案を拒絕した。家庭の中に凄じい嵐が吹起つた。

Honoré は頑固であり、母親も一徹であつた。父親は母親ほどではなかつたので、まあ試してみようと心を決めた。二年間彼は僅少な送金をうけて、獨りで暮らした。而して文學上の運命が開けるものかどうか試したのである。文壇に出でんとする者にとり、二年の歳月は束の間ではあるが、兎に角父親は、此の間にどうにか決るものと思つてゐたらしい。其二年間が過ぎて少し經つと父親は退職するやうになり、一家は Villeparisis に移轉した。

兵器廠 (Arsenal) に近い Lesdiguièref 街の隨居で、二年の間 Honoré は必死に働いた。その怖しい生活を Peau de chagrin に殆んど如實に描いてゐる。併し彼の決心は非常に固かつた。

彼は一篇の悲劇を作つて、友人の集合した席上で朗讀した。その中には Honoré の妹と結婚する筈の Surville もゐた。併し作物は一同のものに批難された。そこで誰か外に權威ある批判をする人を選ばうといふ事になつた。ある者は Surville の父親 (professeur をしたことのある人) を頼んだらと言ひ、またある者は詩人 Andrieux をと言つた。同様なといふより、寧ろ手厳しい批難が加へられた。劇作は自分の行くべき途でないと知つて、Honoré は他の方面へ進んで行つた。

たが此後も彼の苦難な生活はつづいて行つた、成功したのは借金の途ばかりで、彼は又その借金を返濟するために、無茶苦茶に書かねばならなかつた。"Du noir sur du blanc" (白紙へ墨を塗る) 仕事が晝夜つづいて、傍らカフエーに臂を晴らすことが多かつた。かうした辛い二十年の勞働から彼の尨大な不朽の大作 La Comédie humaine (人生喜劇) は生れたのである。

あらゆる彼の劇作は、この題下に集められてゐるが、その中でも、Scène de la vie de province の刊行は彼の文名を最高潮にしたものである、Engénie Grandet は此の scène の中にあつて、彼の最も代表的作品である。次に對譯した L'Agonie de l'Avare は此の作から引用したものである。

バルザツクの作品的傾向

佛蘭西の小說は彼によつて完全に réalist となつた、これは彼の小說に幻想の影がないといふ意味ではないが、彼のものには大半見えざるものを空想の中に描き上げて行つたといふ跡がないのである。從つて彼の作品には、それまでの他の作品にあつた様な纖細な感情とか、美しい想像とかいふものを見出すことは出來ない。又彼は殆ど自然を書いてゐない。彼の作品に溢れるものは、現實生活の迫力と、その情熱である。彼の時代、卽ち Louis-Philippe 時代の佛蘭西社會の正確な認識は彼の著作によつて完全に得られよう。

Balzac は二つの仕事を成し遂げたと言はれてゐる。その一つは性格小說の擴大であり、他は個性的な描寫をもつ社會小說の創建である。彼はこの後者を完成するために前者を育て上げたといふことも出來よう。彼の傾向は次の時代の天才に傳り、今日に及んでゐるのである。

L'Agonie de L'Avare

Dès le matin il se faisait rouler entre la cheminée de sa chambre et la porte de son cabinet, sans doute plein d'or. Il restait là sans mouvement, mais il regardait, tour à tour, avec anxiété ceux qui venaient le voir et la porte doublée de fer. Il se faisait rendre compte des moindres bruits qu'il entendait; et, au grand étonnement du notaire, il entendait le

守錢奴の臨終

Honoré Balzac

朝から彼は、彼の部屋の煖爐と、金庫の戸口との間にうづくまつてゐた。そこには金が一杯つまつてゐることに間違ひはない。彼はそこにじつとうずまつてゐた。そして彼に面會に來た者達の顏と鐵の二重扉の戸とを交る交る不安氣に眺めてゐた。彼は耳に聞へる限りのどんな些細な音でもきゝ洩しはしなかつた。彼が庭の犬のアクビさへきいたといふことで、その公證人を驚かしたこともあつた。

bâillement de son chien dans la cour.

Il se réveillait de sa stupeur apparente au jour et à l'heure où il fallait recevoir des fermages, faire des comptes ou donner des quittances. Il agitait alors son fauteuil à roulettes jusqu'à ce qu'il se trouvât en face de la porte de son cabinet. Il le faisait ouvrir par sa fille, et veillait à ce qu'elle plaçât en secret elle-même les sacs d'argent les uns sur les autres, à ce qu'elle fermât la porte. Puis il revenait à sa place silencieusement, aussitôt qu'elle lui avait rendu la précieuse clef, toujours placée dans la poche de son gilet, et qu'il tâtait de temps en temps……

Enfin arrivèrent les jours d'agonie, pendant lesquels la forte charpenté du bonhomme fut aux prises avec la destruction. Il voulut rester assis au coin deson feu, devant la porte de son cabinet. Il attirait à lui et roulait toutes les couvertures que l'on mettait sur lui et disait à Nanon (la vieille bonne):—Serre, serre çà pour qu'on ne me vole pas !…… Quand il pouvait ouvrir les yeux, où toute sa vie s'était réfugiée, il les tournait aussitôt vers la porte du cabinet où gisaient ses trésors, en disant à sa fille:

—"Y sont-ils? Y sont-ils?" d'un son de voix qui dénotait une sorte de peur panique.

—Oui, mon père.

—Veille à l'or!—Mets de l'or devant moi!

Eugénie lui étalait des louis sur une table, et il demeurait des heures entières les yeux attachés sur les louis, comme un enfant qui, au moment où il commence à voir, contemple stupidement le même objet; et, comme à un enfant, il lui échappait un sourire pénible.

—Çà me réchauffé! disait-il quelquefois en laissant paraître sur sa figure une expression de béatitude.

Lorsque le curé de la paroisse vint l'administrer, ses yeux, morts en apparence depuis quelques heures, se ranimèrent à la vue de la

彼は睡眠から目覺めるや、小作料を受取り、それを計算し、受領證を書くことに忙殺された。彼はその時には、彼の回轉椅子を金庫の扉に面してゐられる位置まで押しすゝめた。彼はその扉を娘に開かせて、娘自身が秘密にその金の袋を一つから一つへと積み重ねて行く時から、扉を閉るまで見守つてゐた。それから靜かに彼の椅子へ戻つて、娘が彼に貴重な鍵を返すや、それをいつもチョツキの隱しに入れて時々それを手さぐつてゐた……

やがて彼にも死の苦悶の日は訪れてきた、その間にも彼の強靱な體軀は病患と闘つたのであつた。彼は金庫の扉の前の煖爐の傍に坐つてゐようと欲した。彼は、彼の身體の上へかけた上掛けをみんなひきまるめて、彼の(老女である)ナノンに呟くのであつた。閉めて、それを閉めて、人が盜むといけないから!…… そして彼のあらゆる生命が宿つてゐる彼の眼を開げることが出來た時には、彼はすぐとそれを彼の財寶が眠つてゐる金庫の扉へ向けて、娘に

—それはあるかね、それはあるかね? と、何かものに襲はれてゐる様な聲音でいふのであつた。

—えゝ、お父さん。

—金を見張つてゐろ。—金を私の前に置いとけ!

娘のウージェーヌは金貨を彼の眼前にテーブルの上にならべた、そして彼は眼を金貨に吸ひつけられた様にして何時間もゐた、それは丁度、ものを見えはじめた子供が、忙然と同じものを見つめてゐる恰好であつた、そして子供にあつた時の様に、にがつぽろい微笑を洩らしてゐた。

—これは俺を暖める!と、彼は時折、顏に感謝の表情を浮べていふのであつた。

教會の僧侶が彼を得度させに來た時、その數時間前より死せるが如くあつた彼の眼は、十字架、燈明台、銀の聖水盤を見て活氣づき、それ等を見つめた

croix, des chandeliers, du bénitier d'argent qu'il regarda fixemant. Lorsque le prêtre lui approcha de ses lèvres le crucifix en vermeil pour lui faire baiser l'image du Christ, il fit un épouvantable geste pour le saisir, et ce dernier effort lui coûta la vie, il appela Eugénie, qu'il ne vogait pas, quoiqu'elle fût agenouillée devant lui et qu'elle baignât de ses larmes une main déjà froide.

—Mon père, bénissez-moi! demanda-t-elle.

—Aie bien soin de tout, Tu me rendras compte de ça là-bas, dit-il, en prouvant par cette dernière parole que certains avares croient à une vie future.

のであつた。司教が彼の唇に、銀色の十字を近づけて、彼に聖像へ接吻させようとした時、彼はそれをつかもうと驚くべき動作をした。そして此の最後の努力は生命の終りであつた。彼はウーヂエーヌを呼んだ、彼女は彼の床に跪いて、すでに冷たくなつた腕に涙の接吻をしたが、彼はそれを見られなかつた。

—お父さん、私に接吻して下さい！と彼女はせがんだ。

—すべてをよく注意しておくれ、お前はそこで私にそれを報告してくれるだらうね、と彼は言つた。此の最後の言葉は、守錢奴のある者は未來の生活を信じてゐるものだといふことを證明してゐる。

Le Père Grandet

Monsieur Grandet n'achetait jamais ni viande ni pain. Ses fermiers lui apportaient, par semaine, une provision suffisant de chapons, de poulets, d'œufs, de beurre et de blé de rente. Il possédait un moulin dont le locataire devait, en sus du bail venir chercher une certaine quantité de grains et lui en rapporter le son et la farine. La Grande Nanon, son unique servante, qouiqu'elle ne fût plus jeune, boulangeait elle-même, tous les samedis, le pain de la maison……

Ses seules dépenses connues étaient le pain bénit, la toilette de sa femme, celle de sa fille, et le payement de leurs chaises à l'église; la lumière, les gages de la Grande Nanon, l'étamage de ses casseroles, l'acquittement des impositions, les réparations de ses bâtiments et les frais de ses exploitations……

Les manières de cet homme étaient fort simples. il parlait peu. Généralement il exprimait ses idées par de petites phrases sentencieuses et dites d'une voix douce.

D'ailleurs, quatre phrases lui servaient habituellement à embrasser, à résoudre toutes les difficultés de la vie et du commerce: "Je ne sais pas; je ne puis pas; je ne veux pas; nous verrons cela." Il ne disait jamais ni oui ni non, et n'écrivait point.

Honoré Balzac: Eugène Grandet

グランデ親爺

グランデ氏は決して肉もパンも買はなかつた。彼の小作人が週毎に、小作の代償として食用鶏、雛鶏、卵子、牛肉及麥等の一切の食料を持つてくるのであつた。彼は一つの水車小屋を持つてゐた、その賃借人は、その契約の外に、何分の穀物を求めてきて、それを粉にひいて持つてくるのであつた。彼のたゞ一人の傭女のナノンは、もう若い年ではないが、自分で毎土曜日に家中の必要なパンを焼くのであつた……

彼が金を拂ふものといへば僅かに、神へ捧げるパンと、妻君と娘の化粧料と、教會へ席を置いてる家族の費用と、ナノン婆さんの燈火料と給料、スープ鍋の白鑞塗り料、税金の支拂と、家屋の修繕料並に開拓の費用だけであつた……

此男の擧作は至極單純であつた。彼は余り饒舌らなかつた。概して彼はやさしい聲音でいふ簡潔な短い文句で自分の考へを表現した。

尚又、彼が生活や仕事の凡ゆる困難にぶつかつた場合に、習慣的に用ひる四つの言葉があつた。それは「私は知らない」「私には出來ない」「私は好まない」「それを考慮しようぢやないか」である。彼は決して、ウイ(然り)とかノン(否)とかいふ言葉は言ひもしなければ、書きもしなかつた。

VICTOR HUGO (1802-1885)

主なる作品：(詩) Les Orientales (1829), Les Feuilles d'automne (1833), Les Voix intérieures (1837), Les Contemplation (1836), Les Châtiments (1853); La Légende des Siècles (1859, 77, 83), La Fin de Santan.

(劇) Hernani (1830), Ruy Blas (1835), Burgraves (1843).

(小說) Notre-Dame de Paris (1831), Les Misérables (1862), Quatre-vingt-treize (1874).

人及び藝術家としてのユーゴー

ヴイクトル・ユーゴウ (Victor Hugo) が一般に大なる égoïste として映する點をみても解るが、一般多數のための自我としての彼よりは個々人の自我としてみえる。いかなる個々人の自我と雖も滅すべきではない。罪惡はかれ自身にあるのでなくして、寧ろ周圍、云ひ換へれば社會制度にある。さういふものに個々人の自我が壓迫せらるゝ時、個々人の惡が生ずる。團體生活が個々の自我を壓迫した時に生ずる現象そのものが罪惡である。Hugo は個々人の自我を尊重すべきを見、その自我がある時に於て強い自覺に達する時、言ひ換へれば周圍の壓迫と單に對抗する許りでなくその壓迫を超脱して自我そのものゝ姿をみせる時、そこに、決して罪惡ではないところの眞の自我の姿が見られる。自我が他に壓せられない時は即ち罪を脱れてゐる時である。この罪惡を脱して周圍を照らし返すときは、その照らし返したものが『愛』である。Hugo の Les misérable の主人公 Jean Valjean は周圍を反照した愛の權化である。この愛の眼は決して閉づることは出來ないで、どこまでも向上の路に向はないではゐられないのが自我の本性である。

彼は自我そのものに無くして全體が個人を壓した時に起つてくるものではないか。トルストイその他の露西亞の思想家達は『民衆に行け』と說くが、Hugo にあつては『民衆を出でよ』である。貴族が平民に下るのでなく、平民が目を覺して高きに向ふのである。故にある批評家は『かれは天才をもち、且つ極めて平凡な人の魂をもつた人である』と云つてゐる。トルストイは眞に愛を得んとして終生惱んだ人であり、ユーゴオは眞に醒めたる égo の生涯を想像の中で味つた人である。併しいづれにもせよ、吾々人間の現在よりして未來に向ふ姿、換言すれば吾々人間の眞の要求を確めて、その要求に從ふことに人生の價値を見出した點は同一である。たゞその要求、その理想に向ふには想像に對する態度に相違がある。ユーゴオに於ては理想に向ふには想像 (imagination) が寧ろありすぎた位である。それ故、藝術品としてみる時は、かれの作が誇張に過ぎてゐるためにロマンチスト (romantiste) といふ言葉で盡されてゐるやうに思はれるが、今日の吾々からみると豐富な想像の底を通じて流れてゐる人生の眞の姿を更に適確に追求して行くべきではなからうか。殊にかの渺たる一平民、一個人の自我の目醒めから、その波動が小さな渦をまいてその個人の周圍に止まるだけでなく、それが非常な力を以て人間の全體生活のうちに、社會の上に大きな振動を起して行くといふ點に注意すべきである。個々人の眞の自覺に依らなければ、社會人生の改善をなし得られない。漠然たる多數の幸福、社會全體の改革といふ方へのみ目を注ぐ時には、周圍が個々人を壓迫する姿を生じて來はしまいか。

Hugo の求めたところはあくまでも自我の覺醒である。Rousseau の說いた『個人の解放』が Hugo に於て明らかな理想の姿をもつたものである。Hugo の生涯の前半卽ち詩人としての生涯を考へて見ると、如上の理想が未だ確立されないで、その理想が情緒のうちで、乃至はまた想像のうちで理想の融合したものとして歌つてゐたのである。それをまた一方から云へば直接の表現として直に人を動かす點はあるけれど、同時に又捕捉し難い一種の憂愁が漂てゐる。その憂愁といふのは自己の眞の姿を求め得られぬ時の惱みではあるけれども、他のロマンチストのもつてゐる憂愁や悲觀と異る點は、狹くして弱き、小なる惱み悶えでなく、そのうちに一人の自覺が萬人の目醒めを呼起す萌しとなる爲の悲しみ悶えがあつたところで

ある。故に彼の憂愁には偉大さが伴ひ、彼の悲觀には壯嚴が伴つてゐる。齊しく生れんとする惱みにしても、そのうちに他の幾多の自我を代表する意味の惱みが籠つてゐるが故に醜さがない。

詩人としての彼には、今述べた如く、情緒と想像の豐富な流れが出てゐる。その豐富な流れは英吉利の詩人 Swinburn をして『世界で唯一のもの』と賞讃せしめた。

Hugo が他のロマンチストよりは遙に知力が優れてゐたために、彼はロマンチストの統率者となり、十九世紀の半ゞ上までも勢力のあつた所以である。その點が、やがて自己の理想を確立せしめつゝ個人生活より團體生活に、內部より外部へ、下より上に、その醒めた眼を轉向せしめるに到つたのである。A. de Musset の如きは終生、情緒を流露せしめて唱つてゐた人であり、Vigny の如きは、ひたすら自己の內部生活へ向つてのみ眼をそゝいだ人であるが、Hugo に至つては個々人の自我と內部生活を更に浮び出さしめ、外部へ表現せしめる點に於て他の人々に比して一層偉大なのである。ある人はかれを『十九世紀の Voltaire である』と云つた。『かれは外部は火の如く燃えるが、內部は氷の如く冷い人である』とも云はれてゐる。かれに冷靜な理知がなかつたらロマンチシズム (romantisme) は空漠たる感情一片の憧憬に終つたことであらう。即ちかれに依つて始めて個々人の眞の要求が明瞭なものとなり、社會人生の團體的生活の基本が個々の自我に據るべきであることを闡明されたのである。

彼の劇作家としての價値は、劇作そのものよりも、劇についての豐富な議論にありはしまいか。彼はクロムウエル (Cromwell) の序文の中で『詩は幼年期に於ては抒情詩となつて現はれ、青年期には抒事詩となつて現はれ、壯年期には劇となつて現はれる、故に劇には、成人したる人間が凡ゆる經驗を味はひ得るものゝ如くに、その中に美醜正邪善惡等あらゆるものが盛らるべきである。三一致の如きは劇に於ては排除さるべきである。たゞ行爲の一致卽ち性格の一致丈は保留さるべきであるが、それ以外は何等の制限なしに劇の材料となるべきである。自然は藝術と差別をおかゝるべきものではない』と論じてゐる。この主義の下に描き出された彼の劇作は、讀むものとしては兎に角、舞臺に乘せられては亂雜な不統一な、ある一定の時間に印象を與へるものとしては不成功であつたらしい。併し彼の作の底を流れてゐる要求はあくまでも réalistique であるといふことは後の寫實主義 (réalisme) と深い關係がある。Hugo の劇作は romantique でも作の主張が réalistique であつたといふ點こそ、かれの理知が他の人々より、より以上に働いてゐた一つの例證となるのである。

ヴイクトール・ユーゴーの生活

Hugo は 1802 年の二月二十六日に Besançon の極めて質素な家庭に生れた。彼の祖父はナンシーの指物師であつたといふ以外、これといふ記錄さるべきものはない。だが彼の父は l'Empire の將軍であつた。Hugo は、彼の兩人の兄弟 Abel と Eugène と共に父に從つて、ネープルやスペインに赴いた。その後、母と共に Paris へ來て、Feuillantines の古い寺院であつた le Val-de-Grace の裏側にある家に 1803 年から 1813 年まで住つてゐた。

Hugo は最初科學の研究を志したが、此の部門の研究が彼に適しないので、文學へ向つた。彼の最初の詩集 Odes et Ballades が現れたのは 1822 年であつた。間もなく彼の文才は Chateaubriand や Fontaines に見出され、又 Louis XVIII の恩寵をも受けることになつた。彼は此頃すでに、Sainte Beuve や、Antony 及び Emile Deschamp, Louis Boulanger 等と共に一つの文學派を作つて、それを牛耳つてゐた。1841 年の六月には l'Académie Française の會員に推され、1849 年には七月國家の元老院議員ともなつて、政治運動にも積極的に働きかけた。その結果は 1851 年の事變にあつて流罪となり、それから十九ケ年の間 Tersey, Guernesey, Bruxelles などを漂浪して生活した。彼が再び Paris へ戻つたのは九月四日革命の後で、1885 年の五月二十二日に其處で逝去した。

彼の文學生活は六十年の長きに渡り、佛蘭西詩の再建者として、又ローマン派文學の創造者として世界の文學史上に不朽の名をとゞめたのである。

LA DISCRETION

慎しみ

Victor Hugo

Braves gens, prenez gardes aux chose que vous dites.	君よ。君が語ることに心せよ。
Tout peut sortir d'un mot qu'en passant vous perdites.	君が失ひし言の葉の一つ一つよりすべては出づる。
Tout, la haine et le deuil. Et ne m'objectez pas.	怨恨も。悲哀も。君よあげつらひな給ひそ。
Que vos amis sont sûrs et que vous parlez bas:	君が語りし友は確(かた)く且つ君は聲低く語りしと。
Ecoutez bien ceci: tête à tête, en pantoufle.	聽け君よ。額を合せてひそやかに君はさゝやく。
Portes closes, chez vous, sans un témoins qui s uffle,	人知れず君が家の戸をぱとざして。
Vous dites à l'oreille, au plus mystérieux.	君が心の友。
De vos amis de cœur, ou, si vous l'aimez mieux.	あるはまたさばかり愛する人の耳に。
Vous murmurez tout seul, croyant presque vous taire.	あるは君只一人。口には出さで。
Dans le fond d'une cave, à trente pieds sous terre	地下三丈の奥深く。
Un mot désagréable à quelque individu;	何人かをあしざまにそしりつ。
Ce mot que vous croyez qu'on n'a pas entendu,	暗く音も無き場にてかくも小聲に。
Que vous disiez si bas, dans un lieu sourd et sombre,	人知れずいひてし言の葉。
Court à peine lâché, part, bondit, sort de l'ombre.	忽ちに走せ躍りで小蔭より逃れ出でつ。
Tenez, il est dehors, il connait son chemin.	見よや、はや外面(そとも)にありて、その道をぞ知る。
Il marche, il a deux pied, un bâton à la main.	彼は歩みぬ二つの足もて、手には杖を持ちつ。
Debout, souliers ferrés, un passeport en règle;	立ちて草鞋をひきしめ、驛路の證札を手にして。
Au besoin, il prendrait des alles comme l'aigle.	必要あらば鷲のごと翼をばさらばとりてむ。
Il vous échappe, il fuit, rien ne l'arrêtera.	彼は君より逃れ去り、何者もそをとどめざらむ。
Il suit le quai, franchit la place et cæ'era,	堤に沿ひ廣場を横切り。
Passe l'eau sans bateau dans la saison des crues,	船もなくいや增しゝ河を渡り。
Et va, tout à travers un dédale de rues,	街々の迷路を過ぎ。
Droit chez le citoyen dont vous avez parlez,	かくて君が語りて街人の家にぞ入り。
Il sait numéro, l'étage, il a la clef,	彼は部屋名、登り路を知り、鍵をば持ちつ。
Il ouvre l'escalier, pousse la porte, passe,	階段の扉を開き、戸を押して內に入り。
Entre, arrive, et, railleur, regarde l'homme en face,	まともより嘲笑(あざけり)を帶びつゝいふ。
Dit; "Me voilà! je sors de la bouche d'un tel."	「我はある者の口より出で來ぬ。」
Et c'est fait, vous avez un ennemi mortel.	かくて君は不死の敵をぞ持つ。

Alphonse Daudet (1840-1897)

アルフォンス・ドーデ

佛蘭西寫實派の巨匠アルフオンス・ドーデのことは、未だ我國ではさうよくしられてゐないとしても、文藝に親しみを持たれる人であれば、彼の小說「サフオ」"Sapho" の名前はすでに聞かれたことであらう、更に若し佛蘭西語を學んだことのある人であれば、彼の「私の水車小屋よりの便り」"Lettre de mon moulin" を或は覺えて居られるかも知れない。

小說「サフオ」は巴里のある夜の假裝舞踏會を序幕として、外交志願の純眞な一青年と美しい中年の女との戀を描いたものであつて、邦譯も多く、ドーデーものとしては比較的に廣く讀まれてゐる樣である。

「私の水車小屋よりの便り」は二十三の詩の樣に美しい短篇を集めたものであつて、その內には「ボーケールの乘合車」"La diligence de Beaucaire"「スガン氏の牝羊」"La chèvre de M. Seguin,"「サンギネールの燈臺」"Le phare de Sanguinatres"「詩人ミストラル」"Le poète Mistral" などの題を持つた作品が入つてゐる。

ドーデーを一言にして評せば、機細な感情と、豐かな想像力と、美しい文章とを持つた人生の寫生的畫家といつたらよいだらう。彼自身の眼のあたり見たこと、味はつたことを如實に描きだすことにかけて、彼は絢爛な文才に富んだ佛蘭西の文學界にも稀有な腕を持つてゐた。それに彼の少年時代に不幸な生活を送つたことから、此作家の心底には貧窮や逆境にゐる人々に常に暖かい同情があつた、これは彼の作品の全體にしんみりとした氣持、東洋的な香ひを與へてゐる。それと共に又南國人らしい樂天的な明るい性格は彼を、又彼の作品を社交的なものとしてゐた、かうして彼はその時代で凡ての階級の人々から最も愛された作家であつた。彼の作物が今日もなほ世界に普遍的に愛好されてゐるのも、さうした性格的効果であるかもしれない。もう一つ此作家の近代的である特色は、彼が當時の佛蘭西文學者の間には珍らしく音樂をよく解してゐたことである。彼の著書の內にもこんな事が書いてある、『大分時が經つた頃、ツルゲネフ (Tourguenev) は、自分はパスドルー (Pasdeloup) の音樂會へ行つて、女達と一緒にならなければならないと言ひ出した、それ故私は彼と一緒にフローベール (Flaubert) の家を辭した。私は彼が音樂を愛してゐることを知つて悅んだ。佛蘭西では文學者は一般に音樂に對して怖れを抱いてゐる、それ故繪畫がその代りになつてゐるのだ。テオフイル・ゴーティエ (Théophile Gautier)、サンド (Sand)、ヴイクトール・ユーゴー (Victor Hugo)、バンヴイユ (Banville)、ゴンコール (Goncourt)、ゾラ (Zora)、ルコント・ドリール (Leconte de Lisle)、これ等は誰れも音樂嫌ひである。これは私の最も深く信ずるところであるが、色彩に對して無智で、音樂に熱情を有する者は誰れかといへば先づ私である。これは疑ひなく私の南國的氣質と、近視(ちかめ)から來るので、一つの官能が他の官能を犧牲にして發達したのである。ツルゲネフに於いても音樂の趣味は彼の巴里に於ける教育の一部分である、彼はそれを彼の生活の周圍から吸込んだ』と。

形式主義の文學者達は、彼と Balzac を等しく同じ自然主義 (réalisme) の範疇に置いてゐるが、此の兩者には全く異つたものがある、Balzac にあるものは熱情的な力と强い本能とである、併し其處には纖細な感情と高潔な人格とを缺いてゐた、Daudet は此 Balzac に全くないものを持つてゐた、そして Daudet は Balzac の全く書かなかつたものを書いてゐたといふことが出來よう。Daudet の作品の上には、後者のそれによく見出される樣な vulgaire (卑俗) な影は少しもない、そして élégant (優雅) といふ言葉に彼の作品を想像することも出來よう。Daudet の數多い著作の內でも、かうした此作家の特色を窺ふに最も適した作品は "Le petit chose"「ちびつ子」であらう、それはいかにも Daudet らしい物の見方と文章に充滿してゐる、それは又彼の半生の自叙傳でもある。彼が此作に手を着けたのは千八百六十六年の二月であつた。

彼はこの少し前から、書きかけの Drama (戲曲) の最終の場面を書上げる爲に巴里からづつと南へ離れたボーケール (Beaucaire) とニーム (Nîmes) の中間の淋しい田舍へ來てゐたが、その閑居の憂鬱であつたことや、自分の故鄉に近い土地の生活から、少年時代の追憶やらで、どうしてもドラマを書く氣持とそぐはなくなつて、とうとうその方の筆を捨てゝ、"Le Petit Chose" を書く氣になつたのである。そして最初のうちは隨分と夢中に書き續けたらしい、併し彼が此作の前篇を書き上げた頃に、彼の生活には大きい變化が起つた、それは彼が結婚したことであつた。その爲に此原稿のことなども久しく顧みられなかつた。そしてその後篇へ筆を下したのは、それから餘程後ちのことであつた、すつかり書き上げたのは千八百六十七年の秋であつた。『私の書いたものゝうちで、始終こんな浮々した氣持で書いた書物はほかにない』と、彼は此作品について言つてゐる。それほど此作を書いた頃は、彼の心は歡喜に滿されてゐた。殊にその短篇は祝福された新婚生活の內で筆を取つたものであつた。

『私はブチ・ショーズを、ある時は公園の端れの苔むした土手の上に坐つて書いた、そこでは唯だ兎共が飛跳ねるのや雜草の間を辷つてゆく蛇に氣持が亂されるのみであつた。又池に浮んだボートの中で書いた、池は赫灼とした夏の空から反射されるあらゆる色彩を映してかゞやいてゐた。また雨の日は、私の部屋でも書いた、その時には妻がショパン (Chopin) を彈いてくれた。ショパンの音樂、私がそれを聞くごとに必ず心に思起させることは、楡の樹の綠り、海に落ちる雨だれの音、七面鳥の鋭い叫びや雉の聲、そしてそれに混る花の咲いた樹々の香や温つた森のにほひである』と、彼は又書いてゐる。なほ彼は此作に於いて彼は一層英國の Dickens に似通つた作家となつてゐると言はれてゐる。

彼の作品は上に擧げた三つのものゝ外に、巴里の生活を描いた四つの小說、"Froment jeune et Risler aîné"「若きフロモンと兄のリスレ」、"Jack"「ジャツク」、"Le Nabab"「なり上りもの」、"Les Rois en exil"「漂浪の王」と、佛國南方の Tarascon に構圖をとつた奇警的な小說 "Tartarin de Tarascon" 及びその終篇である "Tartarin sur les Alpes"、Daudet は此の小說でタラスコンの人達を久しい間怒らして了つた、彼が南方へ旅して此のタラスコンの停車場を通る時は戰々恐々してゐたと彼自身も言つてゐる。それから "Contes du lundi"「月曜物語」、"Lettres à un Absent"「去りたる者へ」、"Les Femmes d'Artistes"「藝術家の妻」、"Numa Roumestan"「ニユマ・ルーメスタン」、救世軍の社會運動を題材とした、"L'Evangéliste"「福音傳道者」、佛蘭西翰林院を揶揄した "L'Immortel"「死せざるもの」、自傳的な讀み物である "Trente ans de Paris"「巴里の三十年」と "Homme de lettres"「文人」、"Port Tarascon"「タラスコンの港」、"Rose et Ninette"「ローズとニネト」、"La Petite Paroise"「小さい教區」、"Mœurs Conjugales"「婚姻の習俗」、"Soutien de Famile"「家庭の維持」、"Entres les Frises et la Rampe"「フリーズとランプの間に」、"Notes sur la Vie"「生活控への記」、"La Belle Nivernaise"「美しいニヴエルネーの女」、"Le Trésol d'Arlatan"「アルラタンの寶」等はいづれも千八百七十三年から千八百九十七年に渡つて彼が書いたものを逐年的にあげたものである。

此以前には主に詩 (Poèmes) と戲曲 (Drama) を書いてゐた、彼の最初の作品は 'Les Amoureuses"「戀する人々」と呼ぶ詩集であつた、これは千八百五十八年に出た。それから同じく詩集の "La Double conversation"「二重の交涉」と "Le Roman du Chapron Rouge"「シヤプロン・ルーデユの話」、二つの戲曲、"La Dernière Idole"「最後の偶像」と "L'OEillet Blanc"「白石竹」。又その後に數種の脚本を書いた、その內には "La Lutte pour la Vie"「生に對する鬪爭」、"L'Obstacle"「障碍」、"L'Arlésienne"「アルルの女」などがある、その內で最後のものが一番好評を博してゐた。

因みに彼は千八百四十年に地中海の海風薰る佛蘭西南方の町ニーム (Nimes) で生れて、千八百九十七年に巴里に歿した。マダム・ドーデも筆とる道に長けてゐて、よく夫の仕事を援けた、「此の夫妻が共に勞作する樣子は恰度兄と妹の樣だ」と、Goncourt はその日記に書いてゐる。ドーデの後半生はかうした結婚生活に惠まれてゐた。

LES YEUX NOIRS

Sarlande est une petite ville des Cévennes, bâtie au fond d'une étroite vallée que la montagne enserre de partout comme un grand mur. Quand le soleil y donne c'est une fournaise; quaud la tramontane souffla, une glacière.....

Le soir de mon arrivée, la tramontane faisait rage depuis le matin; et quoiqu'on fût au printemps, le petit chose, perché sur la haut de la diligence, sentit, en entrant dans la ville, le froid la saisir jusqu'au coeur.

Les rues étaient noires et désertes..... Sur la place d'armes, quelques personnes attendaient la voiture, en se promenant de long en large devant le bureau mal éclairé.

A peine descendu de mon impériale, je me fis conduire au collège, sans perdre une minute. J'avais hâte d'entrer en fonction.

Le collège n'était pas loin de la place; après m'avoir fait traverser deux ou trois larges rues silencieuses, l'homme qui portait ma malle s'arrêta devant une grande maison, où tout semblait mort depuis des années.

—C'est ici, dit-il, en soulevant l'énorme marteau de la porte.

Nous entrâmes. J'attendis un moment sous le porche, dans l'ombre. L'homme posa ma malle par terre, je le payai, et il s'en alla bien vite.....Bientôt après, un portier somnolent, tenant à la main une grosse lanterne, s'approcha de moi.

—Vous êtes sans doute un nouveau? me dit-il d'un air endormi.

—Je ne suis pas un élève du tout, je viens ici comme maître d'étude; conduisez-mois chez le principal.....

Le portier parut surpris; il souleva un peu sa casquette et m'engagea à entrer une minute dans sa loge. Pour le quart d'heure, M. le principal était á l'église avec les enfants. On ne mènerait chez lui dès que la prière du soir serait terminée.

黒 い 眼

Alphonse Daudet

サルランドは到る處大きな壁の樣な山に圍まれた狹い谷間の底に出來た、セヴアンヌの小さな町であつた。太陽が輝く時はそれは燒竈の樣に熱く、北風の吹く時は氷室の中に居る樣に寒冷であつた。

私の到着した夜は、北風が朝から吹き搖つてゐた、時は春であつたとはいひながら、馬車の上にうづくまつてゐた「ちびつ子」は、此町へ入ると寒さが骨味に泌み渡る樣にこたへた。

路は闇くて寂びれてゐた……軍用廣場では、二三の人がうす闇い商店の前を右往左をうして車を待つてゐた。

車の二階から降りるとそこそこに、私は一直線に學校へ赴いた、私はそれほど就職することにあせつてゐたのだ。

學校は其場所から遠くはなかつた。二三の廣い、だが淋しい街を横切つてから、私の大鞄を荷つた男は、まるで幾年も前から人の入つたことのない樣な、大きな家屋の前に立止つた。

「こゝがさうです」と、彼は無恰好に大きな叩戸環を動かしながら言つた。

兩人は入つた、私は一寸玄關のうす闇がりに立止つた、伴れの男は私の鞄を床に下した、私は金を拂つた、それを受取ると彼は急いで去つた……それから直きに、寢ぼけた樣な門番が、大きな提灯を手にして私の方へ近附いた。

「あなたは新入生ですね」と、彼は眠さうな眼をしばたゝいて言つた。

「いや、私は生徒ぢやない、こゝへ教師として來たのです、校長室へ御願みします。」

門番は一寸驚いたらしかつた、彼は少し帽子を傾けて、暫時自分の室に休まれる樣に私を招じた。十五分程、校長は生徒と共に御堂に行くのであつた、その夜の祈禱が終つてから、私は校長室へ案内されることになつた。

LA DERNIÈRE CLASSE

(Récit d'un petit Alsacien)

Ce matin-là, j'étais très en retard pour aller à l'école, et j'avais grand'peur d'être grondé, d'autant que M. Hamel nous avait dit qu'il nous interrogerait sur les participes, et je n'en savais pas le premier mot. Un moment, l'idée me vint de manquer la classe et de prendre ma course à travers champs.

Le temps était si chaud, si clair! On entendait des merles siffler à la lisière du bois, et dans le pré Rippert, derrière la scierie, les Prussiens qui faisaient l'exercice. Tout cela me tentait bien plus que la règle des participes: mais j'eus la force de résister, et je courus bien vite vers l'école.

En passant devant la mairie, je vis qu'il y avait du monde arrêté prés du petit grillage aux affiches. Depuis deux ans, c'est de là que nous sont venues toutes les mauvaises nouvelles, les batailles perdues, les réquisitions, et je pensai sans m'arrêter: "Qu'est-ce qu'il y a encore?"

Alors, comme je traversais la place en courant, le forgeron Wachter, qui était là avec son apprenti de lire l'affiche, me cria: "Ne te dépêche pas tant, petit; tu y arriveras toujours assez tôt, à ton école." Je crus qu'il se moquait de moi, et j'entrai tout essoufflé dans la petite cour de M. Hamel.

D'ordinaire, au commencement de la classe il se faisait un grand tapage qu'on entendait jusque dans la rue; les pupitres ouverts, fermés, les leçons qu'on répétait très haut tous ensemble en se bouchant les oreilles pour mieux apprendre, et la grosse règle du maître qui tapait les tables: "Un peu de silence!"

Je comptais sur tout ce train pour gagner mon banc sans être vu; mais justement ce jour-là tout était tranquille, comme un matin de dimanche. Par la fenêtre ouverte, je voyais

最後の課業

アルサス少年の話

Alphonse Daudet

その朝は僕は學校へ行くのが大變遲くなつた、そして僕は叱られるのが非常に氣になつた、といふのはハンメルさんが分詞のことを聞くからねと云つたのに一言も知らないのだもの。一時は、缺席して原にぶらつきにでも出掛けようかとも思つた。

陽氣は暖かで、天氣はいゝ！ 森のはづれでつぐみが鳴いてゐるのや、木挽場の後ろのリツペール牧場でプロシヤ人が練兵してゐるのが聞えてゐた。この方が分詞の規則よりもどれほど面白いかしれないと思つたが、思ひ直して學校の方へ駈け出した。

市長官舍の前を通ると、人が多勢、掲示用の小板の邊りに立つてゐるのを見た。二年この方、凶い報知や、敗戰や、徵發と云ふことが判るのはあそこでゝあつた。『今度は何だらう』とは思つたが立止りはしなかつた。

その時、私がそこを駈けて通ると、鍛治屋のワシュテがそこに弟子を連れて掲示を讀んでゐたが、大聲を上げて『少さいの、そんなに急ぎさんな、お前さんはいつもなかなか早く學校へ行きなさるよ』と私に云つた。僕はかれが揶揄つてゐるのだと思つた。そしてすつかり息を切らしてハンメルさんの小さい校庭に駈け込んだ。

いつも授業の始まる頃には通りまで聞える喧噪が起つてゐる。机をあける、閉める、よく覺えやうといふんで耳を聾するほどの高い聲で一緒に本を繰返して讀む、すると先生の大きな定規が机を叩いて『もつと靜かになさい!』

僕はかういふ騷ぎの間に、一人の目に付かないやうに席に着かうと目論んでゐた、ところがその日に限つて、すつかり靜まり返つてゐる、まるで日曜の朝のやうに。開いてゐる窓から見ると、友達はみ

mes camarades déjà rangés à leur place, et M. Hamel qui passait et repassait avec la terrible règle en fer sous le bras. Il fallut ouvrir la porte et entrer au milieu de ce grand calme. Vous pensez si j'étais rouge et si j'avais peur!

En bien! non. M. Hamel me regarda sans colère et me dit très doucement: Va vite à ta place, mon petit Frantz: nous allions commencer sans toi." J'enjambai le banc et je m'assis tout de suite á mon pupitre. Alors seulement, un peu remis de ma frayeur, je remarquai qui notre maître avait sa belle redingote verte, son jabot plisse fin et la calotte de soie noire brodée qu'il ne mettait que les jours d'inspection ou de distribution de prix. Du reste, toute la classe avait quelque chose d'extraordinaire et de solennel.

Mais ce qui me surprit le plus, ce fut de voir au fond de la salle, sur les bancs qui restaient vides d'habitude, des gens du village assis et silencieux comme nous, le vieux Hauser avec son tricorne, l'ancien maire et puis d'autres personnes enore. Tout ce monde-là paraissait triste; et Hauser avait apporté un vieil abécédaire mangé aux bords qu'il tenait grand ouvert sur ses genoux, avec ses grosses lunettes posées en travers des pages.

Pendant que je m'étonnais de tout cela, M. Hamel était monté dans sa chaire, et de la même voix douce et grave dont il m'avait reçu il nous dit: 'Mes enfants, c'est la dernière fois que je vous fais la classe. L'ordre est venu de Berlin de ne plus enseigner que l'allemand dans les écoles de l'Alsace et de la Lorraine... ..Le nouveau maître arrive demain. Aujourd'hui c'est votre dernière leçon de français. Je vous prie d'être bien attentifs." Ces quelques mots me bouleversèrent. Ah! les misérables, voilà ce qu'ils avaient affiché à la mairie!

Ma dernière leçon de français!.....Et moi qui savais à peine écrire! Je n'apprendais

んな席についてハンメル先生は、腕の下にあの恐ろしい鐵の定規を抱き込んで、彼方此方と歩いてゐる。扉を開けてこの靜かな眞中へ這入つて行かなければならない。考へて下さい、どんなに僕が赤くなつてびくびくしてゐたか。

さあ、ところが大違ひ。ハンメル先生は別に叱りもしないで、どくやさしく僕に云ふには『さあ、フランツさん、早く席へおつきなさい、あなたのこない内にもう始めようとしたところです』。僕は腰掛をまたいで、すぐ机に向つた。その時始めて少し落付いて私は先生が視察の日か褒賞授與式でなければ着ない綺麗な青いフロツコートや細かい襞の襟飾や縫とりのある黑絹の山高をつけてゐるのに氣がついた。それ許りでなく、教場全體が何だか非常に變つて、嚴かな樣子だつた。

けれども最も吃驚したのは、教場の端に平常は空の腰掛に、村の人達が僕等と同樣に靜かに腰をかけてゐるのをみたことである。三角帽をもつたボウゼ老人、前市長、それからまだ外の人も。みんな悲しさうにみえた。ボウゼ老人は緣を虫が食つた初步讀本を、その膝の上に大きくひらいて、頁を横切つてその大きい眼鏡を置いて。

こんな事に驚いてる間に、ハンメルさんは教壇に上つて、僕に云つたと同じやうな優しいが嚴そかな聲で、云つた。『皆さん、私が皆さんに授業をいたすのもこれが最後です。アルサス及びロレン州ではもう獨逸語より以外教へてはならぬといふ命令が伯林から參りました。新しい先生が明日お出でになります。今日で佛蘭西語の授業はお了ひです。どうぞよくきをつけてきいて下さい。この數語をきいて私は氣が顚倒した。あゝ、哀しい! 市長官舍の掲示板に書いてあつたのはこの事であつたのだ。

佛蘭西語の授業はこれでおしまひ! 僕は書くことさへ錄に出來ない、それでもう習ふことも出來

donc jamais! Il faudrait donc en rester là!... ...Comme je m'on voulais maintenant du temps perdu, des classes manquées à courir les nids et à faire des glissades sur la Saar! Mes livres, que tout à l'heure encore je trouvais si ennuyeux, si lourds à porter, ma grammaire, mon histoire sainte, me semblaient à présent de vieux amis qui me feraient beaucoup de peine à quitter. C'est comme M. Hamel. L'idée qu'il allait partir, que je ne le verrais plus, me faisait oublier les punitions qu'il m'avait infligées.

Pauvre homme! C'est en l'honneur de cette dernière classe qu'ils avait mis ses beaux habits du dimanche, et maintenant je comprenais pourquoi ces vieux du village étaient venus s'asseòir au bout de la salle. Cela semblait dire qu'ils regrettaient de ne pas y être venus plus souvent, à cette école C'était aussi comme une façon de remercier notre maître de ses quarante ans de bons services, et de rendre leurs devoirs à la patrie qui s'en allait.....

J'en ètais là de mes réflexions, quand j'entendis appeler mon nom; c'était mon tour de réciter. Que n'aurais-je pas donné pour pouvoir dire tout au long cette fameuse règle des participes bien haut, bien clair, sans une faute! Mais je m'embrouillai aux premiers mots, et je restai debout à me balancer dans mon banc, le cæur gros, sans oser lever la tête. J'entendais M. Hamel qui me parlait: "Je ne te gronderai pas, mon petit Frantz, tu dois être assez puni. Voilà ce que c'est. Tous les jours on se dit: "Bah! j'ai bien le temps, j'apprendrai demain." Et puis tu vois ce qui arrive.....Ah! ç'a été le grand malheur de notre Alsace de toujours remettre son instruction à demain. Maintenant ces gens-là sont en droit de nous dire:" Comment! vous prétendiez être Français et vous ne savez ni parler ni écrire votre langue!....." Dans tout ça, mon pauvre Frantz, ce n'est pas encore toi le plus coupable. Nous avons tous notre

ない。それぢや教場に出てゐればよかつた。小鳥の巢を獵り、サアルの上で氷辷りをするので授業を休んだあの時間が今となつてはいかにも勿體ない。つい今が今まであんなに嫌やな、持つにも重い僕の本が、文法書、歷史の本が、今ではいかにも去り難い古い友達のやうに思はれる。それがハンメルさんのやうだ。ハンメルさんは行つて了ふのだ、僕は最早先生を見られないと思ふと、先生が私に與へた罰などはすつかり忘れて了つた。

氣の毒な人だ! 先生が日曜の着物をきたのは、この最後の授業に對してであつた、そして村の老人達が教場の隅に來て坐つてゐることも解つた。それは、この人達が、この學校に度々來なかつたことを悔んでゐる如くに思はれた。これも、わが先生の四十年の勤務に酬ゆる一方法であり、去らんとする國へ對する心からの義務の如きものであつた。

僕がこんな感慨に耽つてゐると、僕の名前が呼ばれた。僕が暗誦する番だ、この有名な分詞の規則を、聲高に、十分ハツキリと、間違一つなく云へれば何をやつてもいゝのだが、私は一言も默目だ。腰掛のところへ立つた儘、胸はふさがり、頭を上げることもせずにゐた。ハンメルさんが僕に云つてることがきこえる。『フランツさん、私はあなたを叱りはいたしません。罰はもう充分です。それが罰です毎日々々「まだ時間がある、明日こそ勉强しよう」と云ひます、とうとうかういふことになりました。その勉强を常に明日にのばすことがわがアルサスの大不幸でした。今になつてその人々は吾々に申します「何と! 佛蘭西人だと云つてもその言葉を話すことも書くことも出來ないとは!」いづれにしても、フランツさん、君が一番惡い譯ではない。吾々がみんな夫々非難されるべきである。

bonne part de reproches à nous faire.

Alors, d'une chose à l'autre, M. Hamel se mit à nous parler de la langue française, disant que c'était la plus belle langue du monde, la plus claire, la plus solide qu'il fallait la garder entre nous et ne jamais l'oublier, parce que, quand un peuple tombe esclave, tant qu'il tient bien sa longue, c'est comme s'il tenait la clef de sa prison.....Puis il prit une grammaire et nous lut notre leçon. J'étais étonné de voir comme je comprenais. Tout ce qu'il disait me semblait facile, facile! Je crois aussi que je n'avais jamais si bien écouté, et que lui non plus n'avait jamais mis autant de patience à ses explication On aurait dit qu'avant de s'en aller le pauvre homme voulait nous donner tout son savoir, nous le faire entrer daes la tête d'un seul coup.

La leçon finie, on passa à l'écriture. Pour ce jour-là, M. Hamel nous avait préparé des exemples tout neufs, sur lesquels était écrit en belle ronde: *France, Alsace! France, Alsace!* Cela faisait comme des petits drapeaux qui flottaient tout autour de la classe, pendus à la tringle de nos pupitres. Il fallait voir comme chacun s'appliquait, et quel silence! On n'entendait rien que le grincement des plumes sur le papier. Un moment, des hannetons entrèrent, mais personne n'y fit attention, pas même les tout petits, qui s'appliquaient à tracer leurs *bâtons* avec un coeur, une conscience, comme si cela encore était du français.....Sur la toiture de l'école, des pigeons roucoulaient tout bas, et je me disais en les écoutant: " Est-ce qu'on ne va pas les obliger à chanter en allemand, eux aussi?"

Tout à coup l'horloge de l'église sonna midi, puis l'*Angelus*. Au même moment, les trompettes des Prussiens qui revenaient de l'exercice éclatèrent sous nos fenêtres.....M. Hamel se leva, tout pâle, dans sa chaire. Jamais il ne m'avait paru si grand. "Mes amis, dit-il, je.....je....." Mais quelque chose l'étouffait: il ne pouvait pas achever sa phrase.

それから、あれこれと、ハンメルさんは佛蘭西語について話し始めた。佛蘭西語は世界第一の美しい言葉、最も明瞭な言葉、最も實質のある言葉だといふこと、またそれを吾々の間に保つて決して忘れてはならぬといふこと、その理由は、一國民が奴隷に落ちても、その國語さへよく保つてゐれば、丸で牢獄の鍵をもつてゐるやうなものであるからといふこと……それから先生は文法の本をとつて、日課のところを讀んだ。僕は解りのいゝのに吃驚した。先生の云ふことが大變容易しく思はれた。僕は生れてからこんなに身を入れて聞いたことはないと思つた、又先生もその說明にこんなに力を入れたことはないと僕は思つた。この氣の毒な先生は、こゝを去る前に、知つてることをすつかり吾々に敎へて一度で吾々の頭に入れさせやうとしてゐるのではないかと思はれる程であつた。

文法の課業が終つて習字にうつる。今日のために、ハンメル先生は吾々にごく新しい手本を用意しておいた。その上には美しい圓字で、「フランス、アルサス! フランス、アルサス!」と書いてある。これは机の支棒につるされて、敎場の周圍を小さい國旗が繞つてゐる如に思はれた。各自がどんなに勉强したか、どんなに靜肅であつたかを見る必要がある。紙の上を走るペンの音より何もきこえない。暫く、金龜子が飛び込んできたが、誰も注意しなかつた、小もい兒童らさへもそんなものには注意しないで、一心に、筆を動かしてゐる、恰もまだ彼等が佛人であるかの如くに。…學校の屋根には鳩が低い聲で鳴いてゐた、そして私はそれをきいて「鳩も矢張り獨逸語で鳴かねばならないのだらうか」と思つた。

不意に會堂の鐘が正午を報じた、それからお祷り。同時に練兵から歸つてくるプロシヤ人のラッパが吾々の窓の下を鳴りひびいた、ハンメルさんは立ち上つた、眞蒼になつて、敎壇の上に。これまで先生が私にこんなに偉く見えたことはなかつた。『皆さん、私は、私は』と云ふが、どうしたのか咽喉が詰つてしまつた、云ひかけた言葉を終ることが出來なかつた。

Pierre Loti (1850-1923)

ピエール・ロチ

Loti は海洋文學者であつた、彼はメランコリーな情緒をもつてエキゾチツク (異國的) な事象に取材して多くの作品を書き上げた。

Pierre Loti は筆名であつて、本名は Louis Marie Julien Viaud である。1850 年に Rochefort に生れ、1867 年に佛蘭西海軍に入つた。それから長く海上生活をつゞけて、日本、亞弗利加、モロツコ、パレスチナ、印度を遍歷した。彼の最初の作品は Bosporus に取材した Aziyadé (1879 年) であつた。それから Le Mariage de Loti (1880), Le Roman d'un spahi (1881), Le Pêcheur d'Islande (1886), Madame Chrysanthème (1887), Propos d'Exil (1887), Japonneries d'Automne (1889), Le Roman d'un Enfant (1890), Le Livre de la Pitié et de la mort (1891), Fantôme d'Orient (1892), Le Désert (1894), Ramuntcho (1903), Vers Ispaham (1904), La Troisième Jeunesse de Mme. Prunes (1905), Les Désenchantées (1906), La Mort de Philoe (1913) などが逐年的に公けにされた。

文學史的に言へば彼の地位は、當時の佛蘭西文學界を支配した Naturalisme の主流から離れてゐた。彼の作品より受ける感じはむしろ Chateaubriand 又は Bernardin de Saint Pierre を回顧させるものがある。

次に揭げる一文は、その著「憐憫と死の書」(Le Livre de la Pitié et de la Mort) の中より拔萃したものである。

LE BOEUF

Au milieu de l'Océan Indien, un soir triste où le vent commençait à gémir.

Deux pauvres boeufs nous restaient, de douze que nous avions pris à Singapour pour les manger en route, On les avait ménagés, ces derniers, parce que la traversée se prolongeait, contrariée par la mousson mauvaise.

Depuis bien des jours ils voyageaient ainsi misérablement, tournant le dos à leur pâturage de là-bas, où personne ne les ramènerait plus jamais. Attachés court par les cornes, à côté l'un de l'autre, et baissant la tête avec résignation chaque fois qu'une lame venait inonder leur corps d'une nouvelle douche si froide, l'œil morne, ils ruminaient ensemble un mauvais foin mouillé de sel, bêtes condamnées, rayées par avance, sans rémission, du nombre des bêtes vivantes, mais devant encore souffrir longuement avant d'être tuées, souffrir du froid, des secousses, de la mouillure, de

牛

Pierre Loti

印度洋の眞中に於て、風が吼りはじめた悲しき一夜のこと。

航行中に食べるために、シンガポールで積込んだ十二頭のうちで、憐れな二頭の牛が吾々に殘つてゐた。人々は、此頃それを大切にしてゐる、惡い貿易風に妨げられて航海が永びいたものだから。

幾日も幾日も、牛どもはかしこなるかれらの牧場を後にして、斯ういふ風にいたましい航海をつゞけてゐた、そして其の牧場へは、誰もかれらを最早や連れて行くことはなからう。二匹は引寄せられて角を短く縛られ、怒濤が非常に冷い新シヤーワで彼等の身體を浸さうと押寄せる度毎に諦めて頭を垂れ、曇れる眼を伏せ、かれらは潮に濡れた惡い糧秣を一緒に反芻した、生きてゐる動物の數から容捨なく豫め抹殺されたる罪せらるべき動物どはいへ、殺されるまでになほ永く寒さや、動搖や、濕潤や、麻痺や、恐怖に苦しむとは……

l'engourdissement, de la peur……

Le soir dont je parle était triste particulièrement. En mer il y a beaucoup de ces soirs-là, quand de vilaines nuées livides traînent sur l'horizon, où la lumière baisse, quand le vent enfie sa voix, et que la nuit d'avance peu sûre. Alors, à se sentir isolé, au milieu des eaux infinies, on est pris d'une vague angoisse que les crépuscules ne donneraient jamais sur terre, même dans les lieux les plus funèbres. Et ces deux pauvres boeufs, créatures de prairies et d'herbages, plus débaysées que les hommes dans les déserts mouvants, et n'ayant pas comme nous l'espérance, devaient très bien, malgré leur intelligence rudimentaire, subir à leur façon l'angoisse de ces aspects-là y voir confusément l'image de leur prochaine mort.

Ils ruminaient avec des lenteurs de malades, leurs gros yeux atones restant fixés sur ces sinistres lointains de la mer. Un à un leurs compagnons avaient été abattus sur ces planches à côté d'eux; depuis deux semaines environ, ils vivaient donc plus rapprochés par leur solitude, s'appuyant l'un et l'autre au roulis, se frottant les cornes par amitié.

Et voici que le personnage chargé des vivres (celui que nous appelons à bord: le maître-commis) monta vers moi sur la passerelle, pour me dire dans les termes consacrés: "Capitaine, on va tuer boeuf." Le diable l'emporte, ce maître-commis. Je le reçus très mal, bien qu'il n'y eût assurément pas de sa faute: mais en vérité, je n'avais pas de chance depuis le commencement de cette traversée-là: toujours pendant mon quart l'abatage des boeufs!…… Or, cela se passe précisément audessous de la passerelle où nous nous promenons, et on a beau détourner les yeux, penser à autre chose, regarder le large, on ne peut se dispenser d'entendre le coup de masse frappé entre les

私が物語つてゐるその晩は殊に憂鬱であつた。海にはかういふ夜が多いのである。その時は光りが薄れ行くところの水平線上を鉛色のいやな雲がさ迷ふ。それから風はその聲を大にし、そして夜は不安の中に進んで行く。此時、涯なき太洋の眞只中に孤立の感にうたれて、夕燒が陸上では、最も陰鬱な場所に於ても引起さないところの漠然とした惱みを人に覺えさせるのである。そして牧場と牧草の動物であるこの二頭の慣れな牛は、動き易い沙漠の中の人間よりも一層當惑して、吾人と同樣に希望を失ひ、彼等の知能の働きは簡單なるにも拘らず、かれらなりに、そして混然とやがて近づく死の姿を認めて、かういふ外象から憂愁の感を非常に深く惹き起してゐるのである。

かれらは病めるもの丶緩やかさを以て反芻した、その大きな表情のない目は凶變ならんとする海の彼方を凝視めてゐる。かれらの友は一つ一つ已れの傍でこの板敷の上で撲殺された、殆んど二週間この方、かくして孤獨のために更にその體を密接せしめて暮した、船の動搖に對しては共に身を支へあひ、友誼のためにその角を擦りつけた。

すると其處へ司厨掛りが、吾々は船中では水夫長書記と呼んでゐるものが、「船長、牛を一匹殺しますぞ」といふ決定的の詞を私になげるために、船橋を私の方へ上つて來た。此奴水夫長書記めとうとうやつてきた。私はかれを頗る不愛憎に取扱つた、確にこの男が悪いことはなかつたけれども。併し實際この航海の始めから私は運がよくなかつた。いつも船橋の當直に際して屠牛があるとは。然るに之がきまつて吾々の歩を運ぶ船橋の下で行はれる、そこでいくら眼をそらし、思ひを他に轉じ波濤を眺めやうとしても、床板の輪へ非常に低く縛られる憐れな前額の眞中めがけて、角の間をうつ多

cornes au milieu du pauvre front attaché très bas à une boucle par terre; puis le bruit de la bête qui s'éffondre sur le pont avec un cliquetis d'os. Et sitôt après elle est soufflée, pelée, dépecée; une atroce odeur fade se dégage de son ventre ouvert, et, alentour, les planches du navire, d'habitude si propres, sont souillées de sang, de choses immondes.

Donc, c'était le moment de tuer le bœuf. Un cercle de matelots se forma autour de la boucle où l'on devait l'attacher pour l'exécution, et, des deux qui restaient, on alla chercher le plus infirme, un qui était déjà presque mourant et qui se laissa emmener sans résistance.

Alors l'autre tourna lentement la tête, pour le suivre de son œil mélancolique, et, voyant qu'on le conduisait vers ce même coin de malheur où tous les précédents étaient tombés, il comprit; une lueur se fit dans son pauvre front déprimé de bête ruminante, et il poussa un beuglement de détresse…… Oh! le cri de ce boeuf, c'est un des sons les plus lugubres qui m'aient jamais fait frémir, en même temps que c'est une des choses les plus mystérieuses que j'aie jamais entendues… Il y avait là-dedans du lourd reproche contre nous tous, les hommes, et puis, aussi une sorte de navrante résignation; je ne sais quoi de contenu, d'étouffé, comme s'il avait profondément senti combien son gémissement était inutile, et son appel écouté de personne. Avec la conscience d'un universel abandon, il avait l'air de dire: "Ah! oui……voici l'heure inévitable arrivée, pour celui qui était mon dernier frère, qui était venu avec moi de là-bas, de la patrie où l'on courait dans les herbages. Et mon tour sera bientôt, et pas un être au monde n'aura pitié, pas plus de moi que de lui.

Oh! si, j'avais pitié! J'avais même une pitié folle en ce moment, et un élan me venait presque d'aller prendre sa grosse tête malade

數の打擊を聞かない譯に行かないのである。ついで獸骨の碎ける音と共に床上に倒れる獸の音、それからみるまに壓殺され、皮をはがれ、寸斷される。劇しいが無氣味の臭氣が、開かれたるその腹部から擴がつて行く、そして周圍一面、常には頗る清潔な船の床が血潮や不潔な物で汚されるのである。

されば、この牛を屠殺する時であつた。一團の水夫達は、屠殺するためにそれを縛りつけねばならぬところの輪の周圍に集つた。そして生き殘つてゐる二匹の中から、最も不恰好なもう殆ど死に瀕してゐる一頭を探しにきた、そしてそれは逆ひもせず連れて行かれた。

その時、今一頭の方は靜に頭を廻らした、憂はしげな眼つきでそれを見送るために、自分より以前のものが皆倒されたところのあの同じ不幸な場所へ、それが引いて行かれるのをみて、かれは悟つたのだ。薄灯りが反芻獸の落窪んだ憐れな前額に落ちた。そして苦惱の叫びを發した。……あゝ！この牛の叫び、それは私が嘗て感じたことのないほど憂鬱な響きであり、同時にそれは私が嘗て耳にしたことのないほど神秘な物である。その叫びの中には人間といふ、吾等凡てのものに對する重大な非難と、それからまた惱ましい諦めのやうなものがあつた。どんな獸聲を發しても無益であり、いくら聲を出しても誰も聞いてくれないといふことを、如何にもかれが深く感じたかの如くである、その息づまるもの、その內容のどんなかは私には分らないが。すべてを拋棄てた心持でかういふやうな樣子をした。あゝ！さうだ……私の一番最後まで殘つた兄弟に對して、避け難き時が到頭來たのだ、そしてその友は彼處から、あの牧場を驅け廻つてゐた故里の國から私と一緒に來たのだ。慮て私の番も來やう、この世の誰一人も彼を憐れまぬと同樣に私をも憐れんでは呉れまい。

おゝ！だが、私だつて可哀想だと思つてゐた！この場合、愚なほどの憐憫さへもつてゐた、そして感激は私を驅つて、その病み厭ふべき大きな頭を

et repoussante pour l'appuyer sur ma poitrine, puisque c'est là une des manières physiques qui nous sont le plus naturelles pour bercer d'une illusion de protection ceux qui souffrent ou qui vont mourir.

Mais, en effet, il n'avait plus aucun secours à attendre de personne, car même moi, qui avais si bien senti la détresse suprême de son cri, je restais raide et impassible à ma place en détournant les yeux..... A cause du désespoir d'une bête, n'est-ce pas, on ne va pas changer la direction d'une navire et empêcher trois cents hommes de manger leur ration de viande fraiche! On passerait pour un fou, si seulement on y arrêtait une minute sa pensée.

Cependant un petit gabier, qui peut-être lui aussi était seul au monde et n'avait jamais trouvé de pitié, avait entendu son appel, entendu au fond de l'âme comme moi; il s'approcha de lui, et, tout doucement, se mit à lui frotter le museau.

Il aurait pu, s'il avait songé, lui prédire:

"Ils mourront aussi tous, va, ceux qui vont te manger demain; tous, même les plus forts et le plus jeuues; et peut-être qu'alors l'heure terrible sera encore plus terrible pour eux que pour toi, avec des souffrances plus longues; peut-être qu'alors ils préféreraient le coup de masse en plein front."

La bête lui rendit bien sa caresse en le regardant avec bons yeux et en le léchant; mais c'était fini: l'éclair d'intelligence qui avait passé sous son crâne bas et fermé venait de s'éteindre. Au milieu de l'immensité sinistre où le navire l'emportait toujours plus vite, dans les embruns froids, dans le crépuscule annonçant une nuit mauvaise, et à côté du corps de son compagnon qui n'était plus qu'un amas informe de viande pendu à un croc, il s'était remis à ruminer tranquillement, le pauvre boeuf; sa courte intelligence n'allait pas plus loin; il ne pensait plus à rien; il ne se souvenait plus.

私の胸の上に支へて、抱かんばかりにせしめた、その時、さうするのが、惱めるもの、または死に瀕せるものを保護するといふ心持で、鎭めるのに吾々に最も自然であるところの、肉體的動作の一つであつたから。

併し、實際にかれは誰からも期待すべき何等の救助を持つてゐなかつた、といふのは極度の苦惱をかれの叫聲から感得した私でさへ、眼を轉じて、ぢつと冷靜な態度を持してゐたのだもの。また牛一匹が絶望に陷つてゐるからとて、船の進路を變へることも、三百人の人々に新鮮な肉の料理を食はせないやうにすることもできないではないか。唯一瞬の間でもそんな考へをもつてる人があれば、立派に白痴として通用できよう。

併し、小さい水夫見習が、恐らくこの男も世界に於て孤獨で嘗て憐憫をうけたこともなかつたのだが、その呼び聲を聞いた、私同謀心の奥深くで聞いた。かれはその牛に近よつて、ごくやさしく牛の面を撫ではじめた。

もしかれが考へてゐたのだつたら、かう豫言し得たであらう。

「あの連中も皆死んで了ふのだよ、さうさう、明日お前を食べようとしてゐる連中はね。最も强壯なものも、最も若いものも皆な。恐らくその際怖るべき時はお前よりもかれらにとつてはなほ一層怖ろしいだらう、さらに永い苦痛を伴つて、恐らくその時には、かれらは眞額を大槌で打たれることを望むであらう。」

その動物は、やさしい目でかれをみ、かれを甜めて、その愛撫に報ゐた。けれどももうおしまひだ。叡智の輝きは、その低く閉ざされたる頭の下を一過して、消え去らんとした。冷やかな飛沫のうちを、不吉な夜を豫報せる薄暮のうちを、たえず速力を增してこの船は航行して行つた、凶兆ある無限の只中に、そして鉤子に吊された醜い一塊の肉に過ぎなくなつた、その友の遺骸の傍に、この憐れな牛は再び靜に反芻しはじめた。その單純な知能は最早や遠くまでは行かず、何も考へず、何も思出さない。

Anatole France (1844-1929)

アナトール・フランスの作品

Gustave Flaubert, Emile Zola, Guy de Maupassant を通じて浪漫主義 (romantisme) から自然主義 (naturalisme) へと移り行つた佛蘭西文學界の一大潮流と全く距つて、十九世紀後半の佛蘭西は纖細な感情と深い創造を持つた二人の天才を生んだ、それは Pierre Loti と Anatole France である。Loti は故國を遠く離れて際涯知らぬ海洋を漂ふ船人の胸に培はれたる憂鬱な感情、偉大な自然に對する悟りの心持、色とりどりな異國情趣を描いた繪の樣な文章によつて、又後者はその博識と懷疑的な哲學的思想と纖細な筆致の魅惑によつて、遍ねく文學愛好者の感情を攝きたてゝゐる。此二人はその仕事については既に過去の人ではあつたが、今なほその作品は佛蘭西文學界の大きい光となつてゐるのである。

Anatole France は 1844 年に、巴里の Malaquais 河岸通りの古い書籍商の家に生れた、本名は Jacques Anatole Thibaut である。その母なる人は深い慈愛の心持と相當な學識とを備へた婦人であつた。彼女は夙くから此小兒の幼い心の內に美しい感情と豊かな詩藻を培つてゐた。彼の文才には此母の力が與つて力あるものであらう。

彼の父も商人ではあつたが、博識なむしろ藝術家肌の人であつて、夜はその店に熱心な同好者が集つて文學の話に興を湧してゐた。此等の人達と入交つて Jacques 少年はその人々の夢中な坐談をすでに小さい心を躍らして聽いてゐたのであつた。

此少年はかうした環境をほかにして、まだ眞に驚くべき程の想像力を持つて生れてゐた。彼はいつとなく此想像力を働かすことに深い興味を感じてゐた。彼は容易に人の感情に住めたばかりでなく、又あらゆる自然の事物、例へば河とか森とか山とかいつたものにまでも自分を變へてみることが出來たのであつた。彼はその著書の內に次の樣に書いてゐる。

"Enfant unique, habiué à jouer seul et toujours enfoncé dans quelque rêverie, vivant beaucoup enfin dans le monde des songes, il ne me fut pas difficile d'imaginer le magasin absent, ses lambris, ses vitrines, ses trumeaux ornés de renommées et même les acheteurs qui affluaient, femmes, enfants, vieillards, tant je possédais le don d'évoquer à mon gré les scènes et les personnes. Je n'eus point de peine à devenir à moi seul les demoiselles, toutes les demoiselles chocolatières et la dame respectable qui tenait les régistres et disposait de l'argent.

Mon pouvoir magique était sans bornes et dépassait tout ce que j'ai lu depuis, dans *L'Ane d'Or*, des sorcières de Thessalie. Je changeais à mon gré de nature: j'étais capable de revêtir les figures les plus étranges et les plus extraordinaires, de devenir, par enchantement, soi, dragon, diable, fée....., que dis-je! de me changer en une armée, en un fleuve, en une forêt, en une montagne.

* *

彼の文才が世に問はれたのは 1868 年に出した Alfred de Vigny についての論文であつた。それから八年の後に Le Noces Corinthinnes が出來た。これから次第に種々な著述を發表していつた。即ち1879年には Jocaste et le Chat Maigre が、1881 年には Le Crime de Sylvhstre Bonard が出來た。此後者の小說によつて彼は一躍近代佛蘭西小說界の巨匠として押されることになつた。これは青年の頃に不幸な戀を經驗してから年老ひるまで獨身生活を續けてゐた考古學者が、久しい年の後にその戀人の若い頃の面影を生寫しにした戀人の孫娘にめぐりあつて、彼女が苦境に落ちてゐるのを救つて結婚させることを書いたので、全體が此老學者の日記として綴られてゐる。此小說の主人公が、博識で意固地で而も自由を愛

しながらも堅苦しい Anatole France の性格と極めてよく一致して、他の創作に彼の缺點として際立つてあらはれてゐる巧みすぎた文章や、不快な皮肉も玆では少しも無理がなく見へる。此の後にはいろいろな短篇小說を書いた、1885年に出來た Le Livre de Mon ami や、L'Ame d'un Enfant もそのうちにある。彼自らが「哲學的小說」と銘打つた、埃及の Thébaïde の物語に題材を得た タイスが現はれたのはそれから五年の後であつた。

Thébaine 平原の一隅、Nil の河畔ひに建てられた僧舍の一僧 Paphnuce が食事の席上で Alexandria から歸つた一僧から、此都で夜々春を鬻いて恥としない舞姫 タイスの噂さを聞いて心を動かすこと深く自ら彼女を說いてその節操のない生活を捨てさせ信仰に歸せしめようと決心した。彼はそれから Alexandria に赴いて親しく彼女にあひ、淳々と信仰の功德を說いた。彼女は一度は拒絕したが、遂に此僧の熱誠に動かされて、身にまとつてゐた美衣を捨て、粗服をつけて彼の手に導かれて其地の修道院に入つた。

タイスの得た信仰は堅かつた、けれど Paphnuce の心持はそれで安らかなではかつた。彼がタイスを救つたのは神の心からではない、むしろ人間らしい嫉妬からであつた。タイスを修導院に移して Thébaide に歸つた彼は日夜につのる煩惱に苦しんでゐた。彼は戀に狂せんばかりであつた。遂に彼はタイスに再會する爲に修導院へ赴いた。其處では悔悟と祈りによつて身を潔めた タイスが最後の息を引取る間際であつた。彼女は安らかな心持で唯神と彼女の身の清淨とのみを念じてゐた、その傍にあつて Paphnuce は彼女に近づく死を呪ひ、唯だ彼の戀のみを語つてゐる、それは實に奇異な狀景ではないか。遂にタイスは死し Paphunce は絕望して倒れる、といふのが此小說の大體である。

此作に於ては、Anatole France の筆は益ゝ圓熟して、美しい叙景の文章を隨所に見ることが出來る。それは將に Chateaubriand や Loti や Flaubert のそれと美を競ふものであるといつてよい。又 Thais は Massenet によつて歌劇に仕組まれてゐる。

タイスの後には小篇の集錄である L'Etui de Nacre があらはれた、Pontinus Pilate の研究や Le Procurateur de Judée は此內にある。それから 1893 年には Abbé Jérôme Coignard の生涯及所說を題材とした二つの小說がある。性慾小說に近い Lys Rouge があらはれたのは 1895 年であつた。此作の內には France 自身の感覺的な戀愛と此小說に描かれてゐる主人公の猛烈な獸的な戀との矛盾が自然のなめらかさを消してゐる。それにも拘らず文章は相變らず美しい。1879 年から 1901 年に渡つて出した四冊の書物 L'Histoire Contemporaine は Monsieur Bergeret と呼ぶ地方の町の羅甸語教師の生活と經驗を語つたものであるが、その主人公 Bergeret は事實 Anatole France その人に過ぎない。此第二卷は有名な Le Mannequin d'Osier である、又第四卷の Monsieur Bergeret à Paris は讀者に Dreyfus 事件の內にある彼を思はせる。それから、1908 年には Sur la Pierre Blanche が、又 1905 年にはその文章の華麗にも描らず杜撰の評ある la Vie de Jean d'Arc が出た。彼の諷刺集である L'Ile des Pingouins とそれから Les Sept Femmes de Barbe Bleue が出たのは 1909 年であつた。Anatole France は漸く老いて來た、むしろ最後のものである Les Deux ont soif は 1912 年に出來た、此後に於ては目ぼしい作品はない。彼は 1893 年の春から le temps の紙上に評論の筆をとつたのを初めとして、批評家としても知られる樣になつた、La Vie à Paris 及び La Vie Littéraire du Temps は此評論を集めたものだ。だが彼は批評家としての領地はその創作に比して遙かに狹かつた。彼の文學評論は dilettantisme のそれとして非難されることが多かつた。

Anatole France は決して moraliste (道德學者) であることは欲しなかつた。彼は良心的であらうとはせずに、良心を表現してゐた。我々は彼に道德を求めず、藝術を求むべきである。彼の哲學的概念は、それが生活の美的表現に關する限り、私達を滿足させるものがあらう。

彼は 1924 年の十月二十二日の夜半十一時、それより二週間ほどの前から病床にあつた後に、靜かに巴里の自宅で逝去したのである。

ABEILLE

Abeille et Georges montèrent un jour, sans qu'on les vit, l'escalier du donjon qui s'élevait au milieu du château des Clarides. Parvenus sur la plate-forme, ils poussèrent de grands cris et battirent des mains.

Leur vue s'étendait sur des coteaux coupées en petits carré, bruns ou verts de champs cultivés, Des bois et des montagnes bleuissaient l'horizon lointain.

—Petite sœur, s'écria Georges, petite soeur, regarde la terre entière!

—Elle est bien grande, dit Abeille.

—Mes professeurs, dit Georges, m'avaient enseigné qu'elle était grande; mais, comme dit Gertrude, notre gouvernante, il faut le voir pour le croire.

Ils firent le tour de la plate-forme.

—Vois une chose merveilleuse, petit frère, s'écria Abeille Le château est situé au milieu de la terre et nous nous trouvons au milieu du monde. Ha! ha! ha!

En effet, l'horizon formait autour des enfants un cercle dont le donjon était le centre.

—Nous sommes au milieu du monde, ha! ha! ha! répéta Georges.

Puis tous deux se mirent à songer.

—Quel malheur que le monde soit si grand! dit Abeille: On peut s'y perdre et y être séparé de ses amis.

Georges haussa les épaules,

—Quel bonheur que le monde soit si grand! On peut y chercher des aventures. Abeille, je veux, quand je serai grand, conquérir ces montagnes qui sont tout au bout de la terre. C'est là que se lève la lune; je la saisirai au passage et je te la donnerai, mon Abeille.

—C'est cela! dit Abeille; tu me la donneras et je la mettrai dans mes cheveux.

アペイユ

Anatole France

アペイユとヂョルヂュとは、ある日誰にも氣付かれずに、クラリードウ城の中央に聳えてゐる天守閣の階段を昇つて行きました。物見臺の上に出ると二人は大きな聲を出したり手を叩いたりしました。

褐色や綠色の小さな方形に遮られた丘陵の方までも見渡されてゐた。森林と群山とは遙なる地平線を靑く彩つてゐた。

「孃ちやん、孃ちやん、地面をずうつと見て御覽なさい。」
とヂョルヂュが大きな聲で言ひました。
「隨分廣いですね。」とアペイユは言ひました。
「學校の先生方は、地面は廣いと、私に敎へて下さつたのですが、うちのジエルトリウード先生の仰しやるには、本當に地面の廣いことは實際見なければわからないのですつて。」とヂョルヂュは申しました。
二人は物見臺を一廻りした。
「兄さん、不思議なことがありますよ。お城は地面の眞中にあるでせう。ですからお城の眞中の天守閣の上にゐる私達は、世界の眞中にゐるのですよ。オホヽヽ!」とアペイユが大きな聲で申しました。
實際地平線は、子供達の周圍に、天守閣を中心にした一つの圓を、作つてゐた。
「僕等は世界の眞中にゐる、アハハ」とヂョルヂュは鸚鵡返しに言ひました。
それから二人とも考へ込んだ。
「世界がこんなに廣いのは、何といふ不幸なことでせう。その中で迷つたり、また友人と別れたりするやうになるのですもの。」とアペイユが申しました。
ヂョルヂュは肩を聳やかして、
「世界がこんなに廣いのは、實に幸福です。こゝでさまざまな變つた事を探せるのですもの、アペイユさん。大きくなつたら、僕は地面のずうつと端にあるあの山を征服したいのです。あすこからお月樣が上ります。僕はお月樣が上る時に掴まへて、あなたにお月樣をあげませうね。」
「さうして頂戴! あなたがお月樣を私に下さつたら、髮の毛の中に入れておきますよ。」とアペイユは言ひました。

Puis ils s'occupèrent à chercher comme sur une carte les endroits qui leur étaient familiers.

—Je me reconnais très bien, dit Abeille (qui ne se reconnaissait point du tout), mais je ne devine pas ce que peuvent être toutes ces petites pierres carrées semées sur le coteau.

—Des maisons! lui répondit Georges; ce sont des maisons. Ne reconnais-tu pas, petite soeur, la capitale du duché des Clarides? C'est pourtant une grande ville: elle a trois rues dont une est carrossable. Nous la traversâmes la semaine passée pour aller à Ermitage. J'en souvient-il?

—Et ce ruisseau qui serpente?

—C'est la rivière. Vois, là-bas, le vieux pont de pierre.

—Le pont sous lequel nous pêchâmes des écrevisses!

—Celui-là même et qui porte dans une niche la statue de la "Femme sans tête." Mais on ne la voit pas d'ici, parce qu'elle est trop petite.

—Je me rappelle. Pourquoi n'a-t-elle pas de tête?

—Mais probablement parce qu'elle l'a perdue.

Sans dire si cette explication la contentait, Abeille contemplait l'horizon.

—Petit frère, petit frère, vois-tu ce qui brille du côté des montagnes bleues? C'est la lac!

—C'est le lac!

Ils se rappelèrent alors ce que la duchesse leur avait dit de ces eaux dangereuses et belles où les Ondines avaient leur manoir.

—Allons-y! dit Abeille.

Cette résolution bouleversa Georges, qui ouvrant une Grande bouche, s'écria:

—La duchesse nous a défendu de sortir seuls, et comment irions-nous à ce lac qui est au bout du monde?

それから、地圖でも見るやうに、二人がよく知つてゐる場所を一心に探した。

「私にはよく判ります」とアベイユが言ひました、(ところがちつども判つてゐなかつたのでした。)「けれども丘の上に播いてあるあの四角な小石は、何だか當てられません。」

「家です。あれは家ですよ。嬢ちやん、君はクラリード公領の首都を知らないの？大きい町ですよ。三つ街路があつてそのうちの一路は馬車が通れます。僕等は先週修行者の家に行くのにその路を通りましたよ。君は覺えてゐますか。」とヂョルヂュは妹に申しました。

「それからあのうねり流れてゐる小川は？」

「それは河です。向ふの方に古い石橋が見えるでせう。」

「わたし達はあの橋の下で蝦を取つたのでしたね。」

「そうですとも、それから凹みには、首のない女の像があります。けれど此處からは見えません、極く小さいから。」

「思ひ出しました。何故首がないのでせう。」

「多分なくなしたからないのでせう。」

此の説明が腑に落ちたかどうかは云はないで、アベイユは地平線を眺めてゐた。

「お兄さま、お兄さま、あの青い山の方にキラキラしてゐるものが見えて？湖ですよ！」

「あれは湖だ。」

その時二人は、危險ではあるが美しい此の湖水のことを公爵夫人が話してお聞かせになつたことを思出した。そして此の湖水には水の精の住家がありました。

「あそこへ行きませうよ！」アベイユは申しました。

この思ひ切りのよい言葉を聞いて、ヂョルジュは吃驚いたしました。そこで大きな口を開いて、叫びました。

「公爵夫人は、私達だけで外出してはいけないと、仰しやつたではありませんか。また世界の端のあの湖水へ、どうして私達が行けるでせう。

—Comment nous irions, je ne le sais pas, moi. Mais tu dois le savoir, toi qui es un homme et qui as un maître de grammaire.

Georges, piqué, répondit qu'on pouvait être un homme et même un bel homme sans savoir tous les chemins du monde. Abeille prit un petit air dédaigneux qui le fit rougir jusqu'aux oreilles, et elles dit d'un ton sec:

—Je n'ai pas promis, moi, de conquérir les montagnes bleues et de décrocher la lune. Je ne sais pas le chemin des lacs, mais je le trouverai bien, moi!

—Ah! ah! s'écria Georges en s'efforçant de rire.

—Vous riez comme un cornichon, monsieur.

—Abeille, les cornichons ni rient ni pleurent.

—S'ils riaient, ils riraient comme vous, monsieur. J'irai seule au lac. Et pendant que je découvrirai les belles eaux qu'habitent les Ondines, vous resterez seul au château, comme une petite fille. Je vous laisserai mon métier et ma poupée. Vous en aurez grand soin, Georges; vous en aurez grand soin.

Georges avait de l'amour-propre. Il fut sensible à la honte que lui faisait Abeille. La tête basse, très sombre, il s'écria d'une voix sourde:

—Eh bien! nous irons au lac!

「どうやつて行けるのか、私なんかには判つてる筈ですね。男だし、文典の先生がついてゐらつしやるのですもの。」

ヂョルヂュは、むつとして、世界中の途を殘らず知らなくても一人前の男に、また立派な人にさへなれると答へました。アベイユが一寸輕蔑したやうな樣子をしたので、ヂョルヂュは耳まで赤くしました。アベイユは無愛想な音調で申しました。

「私などは、山を征服したり、お月樣を外す約束なんか致しませんでした。私は湖水へ行く路は知りませんが、自分でよく探しますわ！」

無理に笑はうと努めながら、ヂョルヂュは大聲に申しました。「あゝ！あゝ！あゝ！」

「あなたは阿房のやうにお笑ひになるのですね。」

「アベイユさん、阿房は泣きも笑ひもしやしません。」

「阿房が笑へばあなたのなさるやうに笑ふのでございます。私は一人で湖水へ參りますわ。水の精がゐる綺麗な湖水を私が探してゐる間、あなたは小さな娘のやうに、獨りでお城に殘つてゐらつしやいまし。私の仕事と人形とをあなたにお殘ししておきますわ。ヂョルヂュさん、そんなものを大切に氣をつけてゐらしつて下さいね。大切にね。」

ヂョルヂュには自尊心がありました。彼はアベイユから與へられた辱しめを感じた。頭を垂れ、極めて温つぽく、鈍い聲で申しました。

「さあ！湖水へ出掛けませう！」

Le Ciel de Paris

J'aime à regarder de ma fenêtre la Seine et ses quais par ces matins d'un gris tendre qui donnent aux choses une douceur infinie. J'ai contemplé le ciel d'azur qui répand sur la baie de Naples sa sérénité lumineuse. Mais notre ciel de Paris est plus animée, plus bienveillant et plus spirituel. Il sourit, menace, caresse, s'attriste et s'égaie comme un regard humain.

Anatole France:
Le Crime de Sylvestre Bonnard.

巴里の空

私は、萬物に無限の靜けさを與へる柔かな鼠色がいつた朝な朝な、私の居間の窓からセーヌとその河岸を眺めるのが非常に好きである。かつて私はナポリの入江の上に輝かしい澄み渡つた碧空を仰いで感嘆したことがあつた。併しながら我が巴里の空はそれよりも更に懐かしく、やさしく而も力强く一層靈感的である。それは人の顏色の樣に、或は笑ひ、或は怒り、或は喜び、或は悲しみ、また愉しむ。

「レルベストル・ボナールの罪」より

全對譯文註解

Le Cid, Pièrre Corneille

3頁12行目 D'un affront si cruel, que といふそれ程の殘虐な侮辱について。

4頁4行目 De grâce, どうぞ後生だから。

Andromaque, Jean Racine

7頁3行目 Vous seriez encore la maî resse de votre sort なほ貴方の運命は貴方のものであらう。(參考) Vous êtes le maitre de の選擇が君の自由である。

8頁5行目 pour quels exploits il sut se couronner その功績のために彼は榮冠をうけることが出來た。sut は savoir の定過去。

9頁8行目 Que faut-il que je dise? 私は何と申上げねばならないのですか? dise は dire の接續法現在。

Le Bourgeois Gentilhomme, Molière

10頁2行目 à fond とことんまで。これは Je vous exp'iquerai (說明しませう) にかゝる副詞句。toutes ces curiosité それに就てめづらしい事、きゝたい事の凡てを。

10頁3行目 Au reste, il faut que je vous fasse une confidence そのほかに、私は秘密を打明けなければならないのです。

11頁19行目 Par la raison que といふ理由から。

11頁35行目 Par ma fois, il y a plus de quarante ans que je dis la prose, sans que j'en susse rien. さてさて、本當のところ(par ma foi)私は何も知らずに、散文を話して四十年余りもゐた。

11頁37行目 le plus obligé du monde 此世で最も世話になつた人、感謝すべき人。

12頁16行目 tournée à la mo le, bien arrangées comme il faut 新しい言廻しに、型通りにとゝのへて。(參考) un gentilhomme comme il faut 禮儀正しき紳士。

L'Agonie de L'avare, Honoré Balzac

18頁3行目 sans doute plein d'or 一杯金のつまつてゐるのに相違ない。

18頁5行目 Il se faisait rend're compte des moindres bruits どんな小さい音でも聽きたゞした(探求した)。

19頁2行目 Il se réveillait de sa stupeur apparente au jour et à l'heur où 彼が無我の境から目覺めた日や時間には。

19頁9行目 les uns sur les autres 上から上へと。(參考) l'un et l'autre 二つともに。les uns et les autres すべてが。l'un ou l'autre どちらも。

19頁13行目 et qu'il tâtait de temps en temps そして彼は時々それを (qu'=la clef 鍵) 手さぐつてゐた。

19頁16行目 fut aux prises avec la destruction 破壞と相爭つてゐた。

19頁29行目 lui etalait des louis sur une table 彼にルイ (二十法に當る金貨) をテーブルへならべて見せた。

19頁34行目 et comme à un enfant, il lui échappait un sourire pénible そして子供の樣に彼はにが笑ひを洩らした。

Le Père Grandet, Honoré Balzac

20頁5行目 de rente, 借地料として拂ふ金錢の外に小作人が地主に贈らねばならないものとして。

20頁6行目 en sus du bail その賃借料金の他に。

20頁12行目 le pain bénit 神に捧げるパン。これは大彌撒に分けるために、各家庭が順番に一塊のパン又はケーキを教會へ收めるのが習慣であることをいふ。

La Discrétion, Victor Hugo

23頁5行目 Et ne m'objectez pas, que..... といふことで私に反對するな。

23頁行28目 et cætera=et le reste その他。ラテン語句。一般に etc. の略字を用ふ。

23頁37行目 Et c'est fait それは完成せり。凡ては終れりの意。

La Dernière Classe, Alphonse Daudet

26頁3行目 d'autant que=parce que, といふ理由で。

26頁31行目 Il se faisait uns grand tapage 大きい喧噪が起つてゐた。Il se faisait (が起つてゐた)は非人稱動詞的用法。

29頁1行目 bonne part=grand part 大きい分け前。

Le Boeuf, Pierre Loti

32頁31行目 Le diable l'emporte 惡魔が彼を捕へた。とんだ破目になつたの意。

33頁29行目 je ne sais quoi de が何だか分らないが。

Abeille, Anatole France:

37頁1行目 sans qu'on les vit 誰れも兩人を見ない中に。

39頁7行目 qui le fit rougir jusqu'aux oreille それが彼を耳まで赤くさせた。fit は faire の定過去。

版權所有

昭和十七年三月十五日印刷
昭和十七年三月二十日發行

佛蘭西語文學講座
定價六十錢
新

著者 平原社編輯部
發行者 荒川金之助 東京市京橋區木挽町八ノ四 八洲ビル
印刷者 川瀨壬子 東京市神田區錦倉町十一
印刷所 第二川瀨印刷所 東京市神田區錦倉町十一
發行所 平原社 東京市京橋區木挽町八ノ四 八洲ビル 電話銀座(57)五番 自一二三三 至一二四二 振替口座東京三四〇一二番

第129007號 東京市神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

特250
485

終